

出雲井遺跡第1次発掘調査報告書

1998

財団法人 東大阪市文化財協会

例 言

1. 本書は、昭和60・61年度に実施した共同住宅建設に伴う出雲井古墳群の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査ならびに資料整理は、財団法人東大阪市文化財協会が(株)浅沼組の委託を受けて実施した。
3. 現地調査は、東大阪市教育委員会文化財課上野利明、財団法人東大阪市文化財協会中西克宏が担当した。
4. 人骨については、現地で長野県看護大学多賀谷昭氏に指導および鑑定していただいた。明記して感謝いたします。
5. 金属製品のX線写真については、奈良大学文化財学科教授西山要一氏にご協力いただいた。深謝いたします。
6. 現地調査にあたっては、浅沼組、安西工業株式会社の方々にご協力いただいた。記してお礼申し上げます。

目 次

例言

I 調査に至る経過	1
II 調査の方法	3
III 調査の成果	4
出雲井6号墳	5
出雲井12号墳	10
出雲井13号墳	14
出雲井4号墳	16
出雲井5号墳	20
出雲井14号墳	34
その他の遺構と遺物	38
IV まとめ	40

I 調査に至る経過

東大阪市の東部には、生駒山地が南北につらなっている。生駒山の西側斜面は、小河川によって幾筋もの谷が形成されるとともに、これらの河川が運ぶ土砂によって堆積した扇状地が山裾に発達している。谷に挟まれた尾根筋や尾根の南斜面の標高30~200m付近には、横穴式石室を埋葬施設とする直径15m前後の古墳によって構成される墓尾古墳群・辻子谷古墳群・神並古墳群・みかん山古墳群・出雲井古墳群・客坊山古墳群・山畑古墳群・花草山古墳群・五里山古墳群・六万寺古墳群浮ネなどの古墳時代後期の

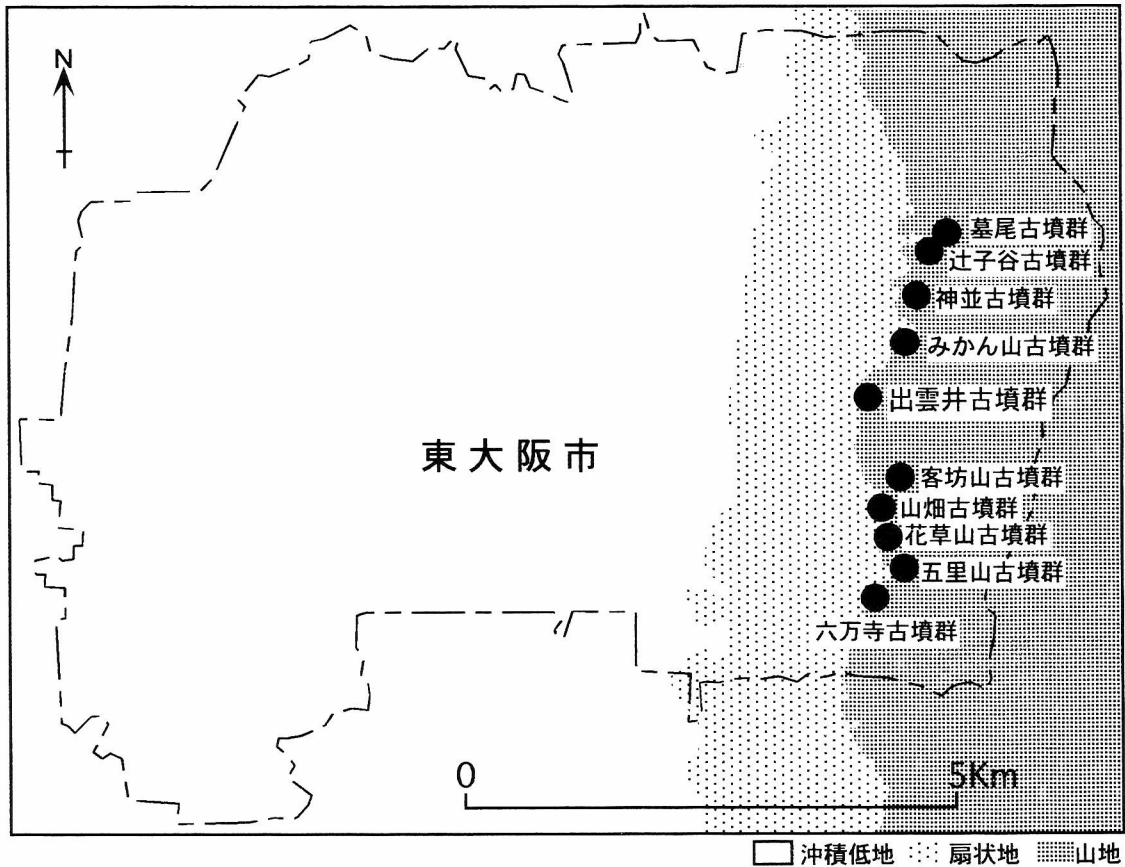


図1 東大阪市域の群集墳の分布

名称	確認数	墳形	外部施設	埋葬施設	埋葬棺	継統期間						
						6世紀			7世紀			
						前	中	後	前	中	後	
墓尾古墳群	5基	円墳 方墳		横穴式石室	木棺 家形陶棺							
辻子谷古墳群	不明	円墳?		横穴式石室								
神並古墳群	21基	円墳 双円墳	周溝	横穴式石室	木棺 石棺							
みかん山古墳群	7基	円墳	周溝 埴輪	横穴式石室 竪穴式小石室	木棺							
出雲井古墳群	14基	円墳 方墳		横穴式石室 竪穴式小石室	木棺 石棺							
客坊山古墳群	18基	円墳		横穴式石室	木棺 石棺							
山畑古墳群	68基	円墳 方墳 双円墳 上門下方墳	埴輪 周溝	横穴式石室 竪穴式小石室	木棺 石棺							
花草山古墳群	31基	円墳		横穴式石室	木棺 石棺 土器棺							
五里山古墳群	13基	円墳		横穴式石室	木棺 石棺							
六万寺古墳群	8基	円墳		横穴式石室 竪穴式小石室	木棺 石棺							

※ 出雲井古墳群は、本調査での確認分を含む。

表1 東大阪市域の群集墳の概要

群集墳が分布している。

これらの群集墳の西側にひろがる扇状地上には、日下遺跡・芝ヶ丘遺跡・神並遺跡・西ノ辻遺跡・植附遺跡・鬼虎川遺跡・鬼塚遺跡・縄手遺跡などがあり、古墳時代中期末から後期初頭頃の遺構・遺物が検出されている。

出雲井古墳群は豊浦谷の南側、標高200m～40mに分布する古墳時代後期の群集墳で、これまでに11基の古墳が周知されている。このうち、本調査地区内には、3基(4・5・6号墳)が存在している。出雲井古墳群のうち、8号墳は横穴式石室の実測図が公表されている。また、4・5号墳は昭和59年



写真1 出雲井8号墳の石室



写真2 出雲井7号墳の石室と出土遺物



に石室周辺部分および石室内の一部の発掘調査が実施され、平安時代以降の石室の利用状況を推定できる土器類が出土している。さらに、7号墳は、昭和60年に発掘調査を行っており、6世紀中頃から末にかけての古墳であることが確認されている。

昭和60年、株式会社浅沼組は東大阪市出雲井町、出雲井本町にひろがる出雲井古墳群内において大規模な共同住宅の建設を計画した。建設予定地内には既に本古墳群を構成する小古墳(4～6号墳)の存在することが周知されていた。このため、建設工事に先立って東大阪市教育委員会文化財課は、原因者と協議を重ねた結果、予定地内に所在する4～6号墳については、共同住宅建設後も古墳を保存する前提で予定地の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、原因者からの委託を受けた財団法人東大阪市文化財協会が昭和60年10月28日～昭和61年4月26日まで現地調査を実施し、以後整理作業をおこなった。

II 調査の方法

共同住宅建設予定地は、東から西へ傾斜する土地を切り土と盛り土によって造成した平坦地がつかっている。調査は、住宅建設予定地のほぼ中央に位置する東西方向の里道を境に北側部分(N地区)の3000㎡を当初立会



写真3 調査地点の調査前の風景



図2 調査地点の位置

調査を実施したうえで、古墳をはじめとする遺構を検出した場合に本調査をおこなうこととした。また、里道の南側部分(S地区)の3589m²は、既に4~6号墳の存在が知られていたため当初から本調査地区とした。なお、原因者との協議の中でこれらの3基の古墳の石室は、調査終了後も現地に現状保存されることになっていたため、全面的な掘り方の掘削はおこなわず、トレンチで確認するにとどめることにした。

N・S地区は、各平坦地ごとに東から順にN1地区、N2地区……S1地区、S2地区……と仮称した。

N地区の立会調査は、重機によって表土および耕作土層を掘削し、遺構の有無を確認した。その結果、N地区で2基の古墳(12・13号墳)を検出したため、この平坦面の本調査を実施することとなった。また、N5地区では中世の遺構を検出したため、この平坦面についても本調査を行うことにした。

III 調査の成果

各平坦面は、東から西へ傾斜する土地の東寄り部分を削り込むとともに西寄り部分を盛り土によって成形している。このため、平坦面の東寄り部



写真4 調査区の航空写真

分は耕作土層の直下で所謂地山を検出している。一方、西寄り部分には厚い盛り土が堆積している。盛り土内に瓦器・土師器・陶磁器類を含むことから平坦地の造成は、この時期には開始され、多くの古墳も削平されたものと推定できる。

本調査の結果、新たに3基(12・13・14号墳)の古墳や中世の遺構を確認することができた。以下では、各古墳の概要を記述してゆく。

出雲井6号墳

出雲井6号墳はN地区、標高約72mに位置し、本調査で実施した古墳のなかで最も低位置に所在している。6号墳の東南約40mには、後述する出雲井5号墳がある。

写真5 出雲井6号
墳の調査前風景



図3 出雲井6号墳
上面図

6号墳は、本調査前からその存在が知られていた古墳で、既に墳丘のほとんどが流失し、天井石と側壁が露出した状態であった。現状の観察で露出していた天井石が石室内に崩落する危険性があったため、石室内全体の調査を断念し、奥壁部分と羨道部分に限り調査を実施することにした。

6号墳は、南向きに開口する横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。古墳周囲の平坦地の造成や墳丘の流失ため、6号墳の墳形および墳丘規模は不明である。石室内全体の調査が実施できなかったため袖の形態は、未確認である。石室の規模は、残存長10.8m・奥壁部分の幅2.4m・現存高2.92mを測る。石室の掘り方は、石室の東側にトレンチを設定して確認したが、平坦面の造成時に既に掘り方底面まで削平されており検出できなかった。奥壁の基底石は、縦置きした2石で構成される。玄室の東側壁は、基底石を縦置きに据え付けたのち、2～4段目の石材を横置きし、ほぼ垂直に積み上げる。横方向の目地は、水平にとおる。垂直方向の目地は千鳥



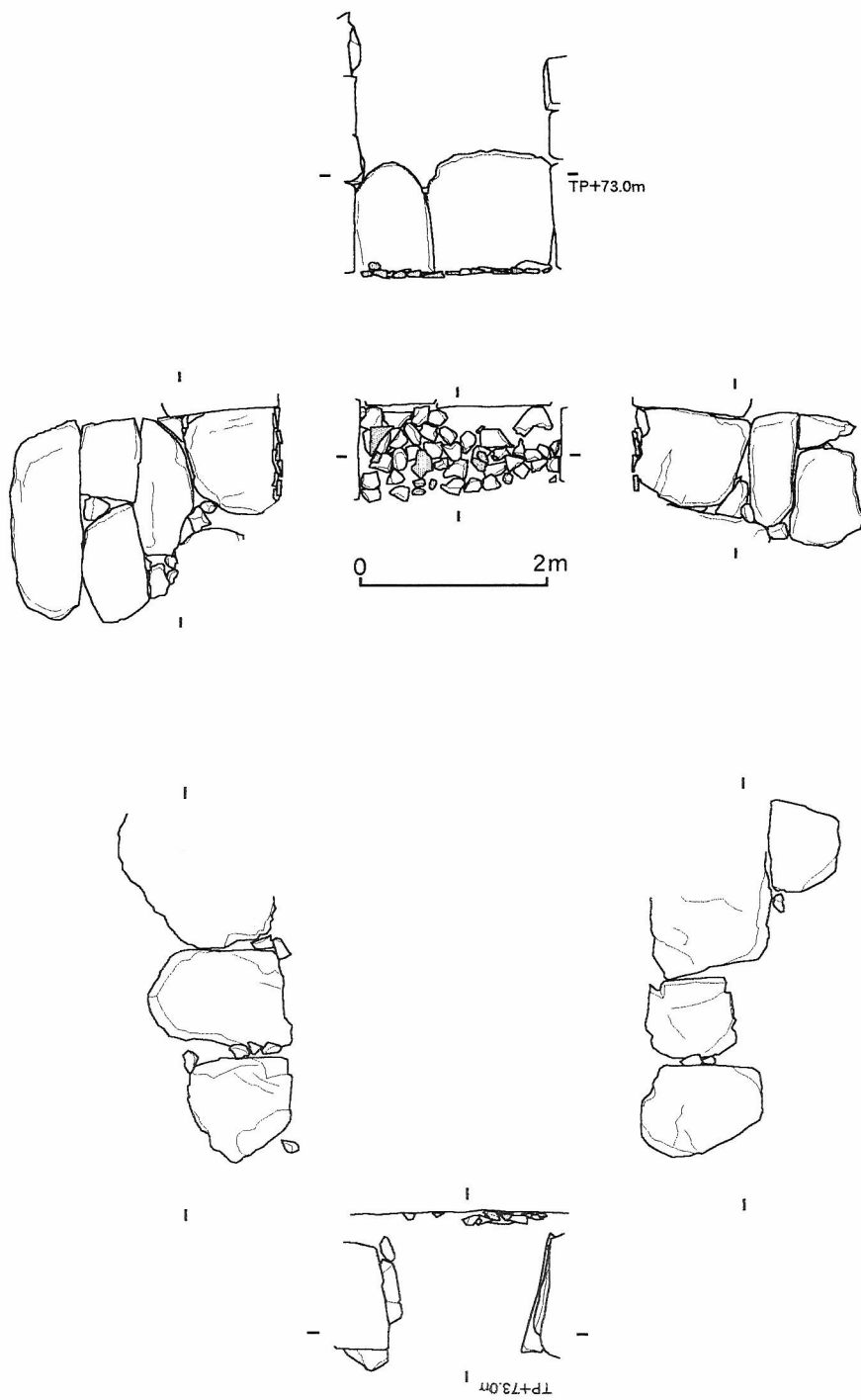


图4 出雲井6号墳石室実測图



写真6 出雲井6号墳石室入り口部分南より

状を呈する。玄室西側壁は3段分残存し、基底石から徐々に持ち送る。石材の積み上げは、基底石を縦置きしたのち2・3段目を横置きする。羨道部の東西両側壁は、縦置きした基底石が残存している。羨道部両側壁の横方向の目地は、玄室に比べ凹凸が著しい。玄室の天井は、3石で覆っている。玄室の床面には、平坦な面を上に向けた人頭大の石を敷き詰めている。敷石上面には、凝灰岩製の石棺片が散乱している。他の遺物は、検出していない。敷石は、羨道部床面まで続いていない。このため、出土遺物から6号墳の時期を推定できないものの、両側壁の基底石を縦置きする点から6世紀末ないし7世紀初頭頃の築造と考えられる。

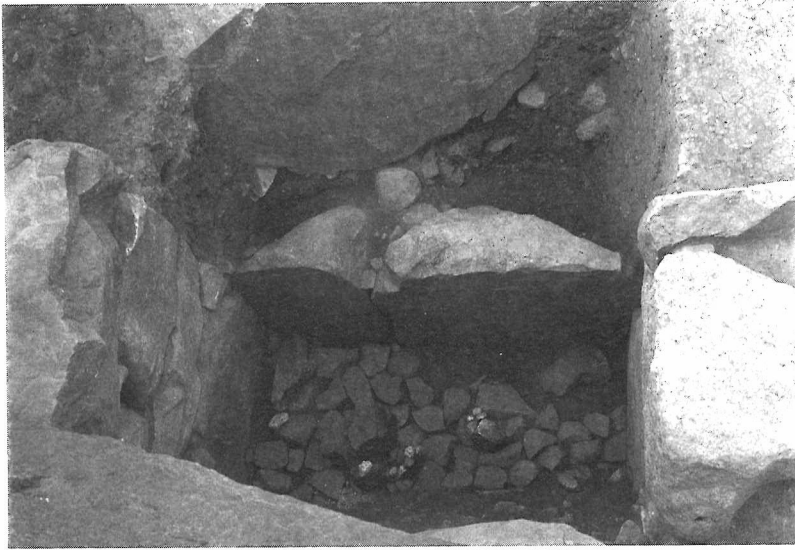


写真7 出雲井6号墳玄室
奥壁部分および玄室床面



写真8 出雲井6号墳玄室の
西側壁

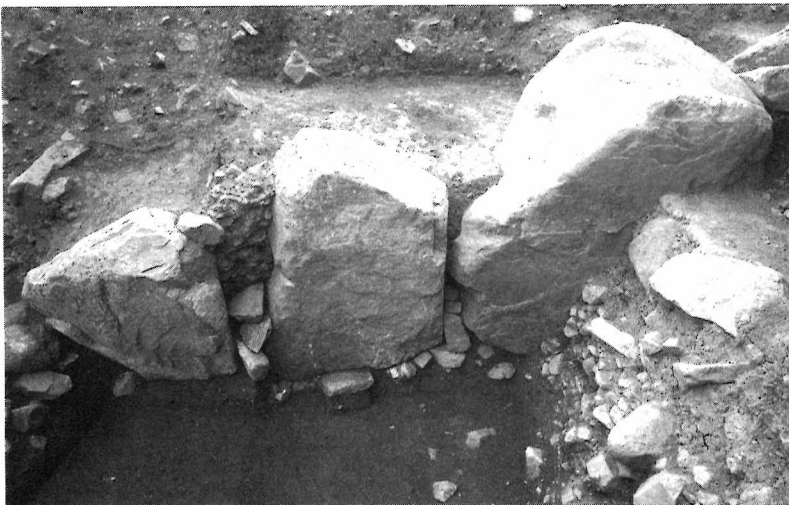


写真9 出雲井6号墳羨道西
側壁羨道

出雲井12号墳

本調査でN地区から新たに確認した出雲井12号墳は、後述する出雲井4号墳の北北東約50mに位置している。出雲井12号墳は、標高約89mにあり、本調査区内で最も高位置に所在している。

出雲井12号墳は、平坦面の造成によって、墳丘と石室の上部が削平をうけている。このため、墳丘規模は不明である。12号墳の墳形は、石室南端部分から東西両方向にのびる石列が直線状に連なることから方墳の可能性もある。12号墳の埋葬施設は、南側に向かって開口する無袖の横穴式石室である。横穴式石室は、全長6.4m・幅0.95m・現存高0.65mを測る。掘り方は、南北長9.4m・東西幅2.25m・現在の深さ0.5mを測る。横穴式石室の奥壁および西側壁は、最下段の基底石のみを残す。東側壁は、部分的に2段目の石材が残存する。



写真10 12号墳全景



写真11 石室東側壁
と床面

奥壁の基底石は1石で構成され両側壁に挟まれる。東西両側壁は、横置きした6石の基底石から成り立っている。側壁に使われた石材の配置や大きさから玄室部分と羨道部分の区別は看守できない。石室床面は全域に人頭大の石を敷き詰めている。敷き石の上には、約2m間隔に東西にならぶ3列の棺台を配している。敷き石上面の鉄釘の分布状況や棺台の配置から、石室内には、2基の木棺が石室の主軸に平行に置かれていたものと推定できる。

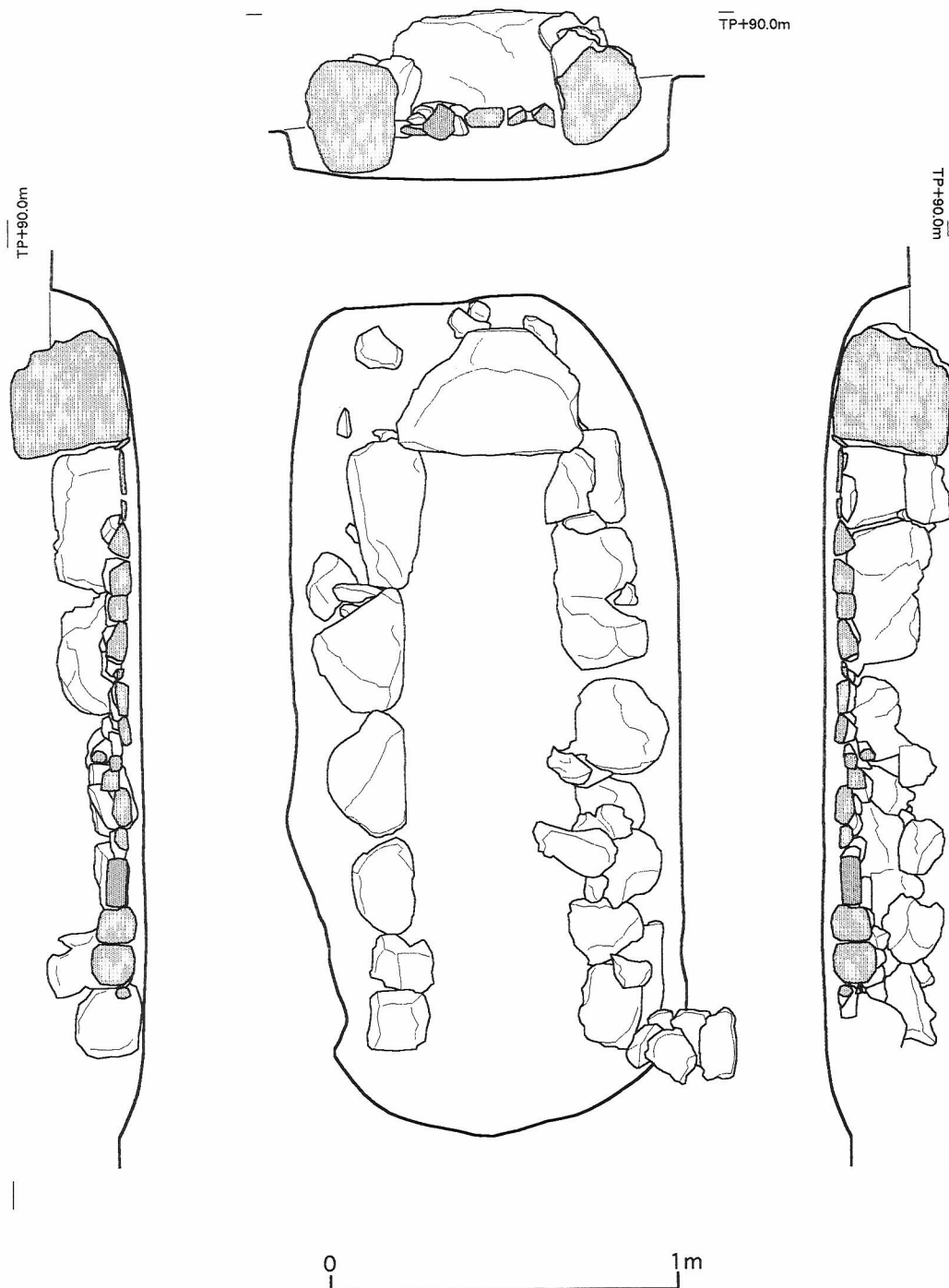


図5 出雲井12号墳石室実測図

敷き石上面からは、奥壁中央付近で須恵器蓋2点・鉄釘、中央の棺台付近で土師器坏・蓋・鉄釘が出土している。須恵器蓋のつまみ部分は、いずれも欠損しており、副葬時に故意に打ち欠いたものと推定できる。床面出土の副葬品から出雲井12号墳の初葬は、7世紀前半、追葬が7世紀中頃と推定



写真12 出雲井12号墳石室内
奥壁部分遺物出土状況



写真13 出雲井12号墳石室内遺物出土状況

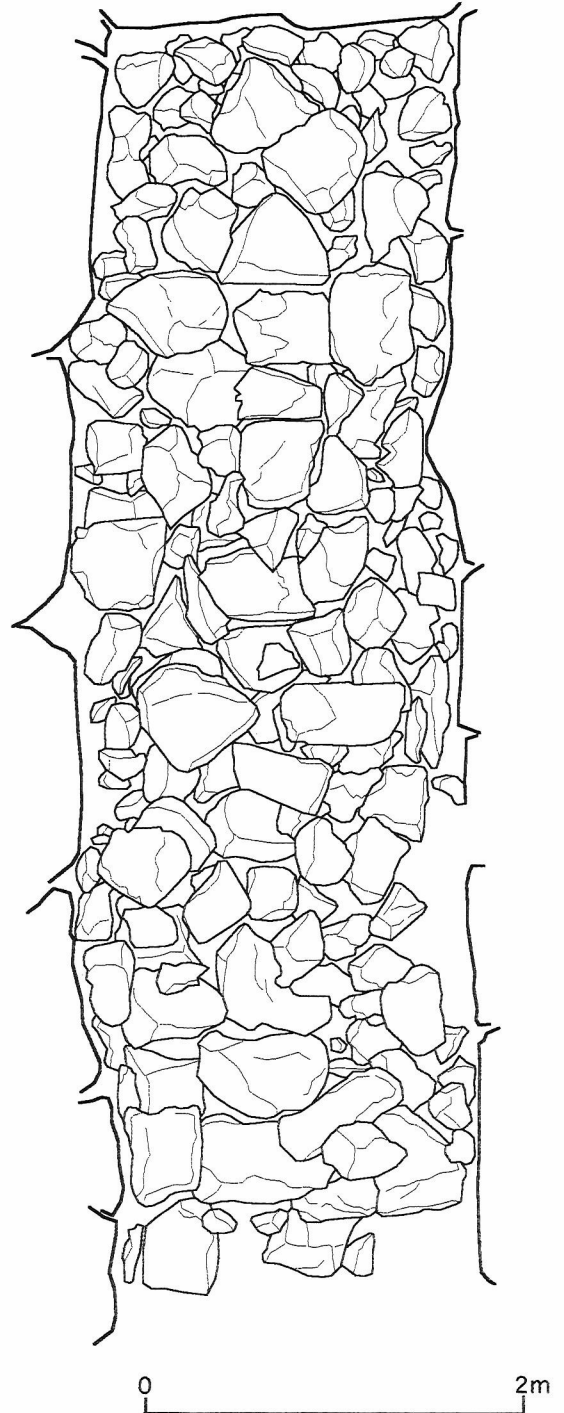


図6 出雲井12号墳床面実測図

できる。

石室の南端部分には南北1.5m・東西1mほどの範囲に閉塞石の一部と推定できる拳大から人頭大の石と器高1mほどに復元できる須恵器甕が細片化した状態で出土している。

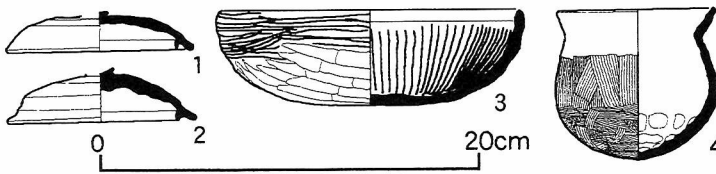


図7 出雲井12号墳出土遺物

報告No.	出土遺構	種類	法量 (cm)	色調	調整手法	
		器種				
報告No.001 図7	出雲井12号墳	須恵器 蓋	口径11.6 器高2.0	5B4/1	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ ヘラケズリ 底部外面	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面
報告No.002 図7	出雲井12号墳	須恵器 蓋	口径9.8 器高2.8	10GY6/1	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ ヘラケズリ 底部外面	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面
報告No.003 図7	出雲井12号墳	土師器 杯	口径15.8 器高5.0		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 横方向のヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデのち放射状暗文 底部内面 ナデのち螺旋状暗文
報告No.004 図7	出雲井12号墳	土師器 甕	口径8.4 器高8.0	7.5YR7/6	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 縦方向のハケメ 底部外面 横方向のハケメ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ナデ

表2 出雲井12号墳出土遺物の特徴

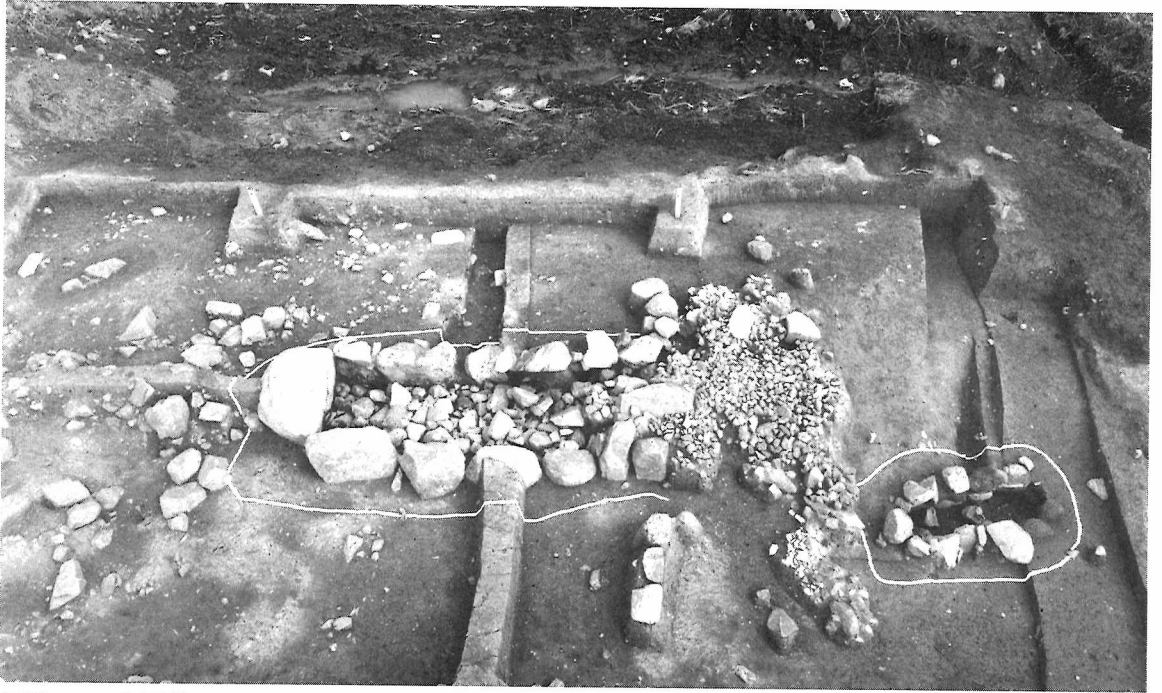


写真14 出雲井12・13号墳全景(西より)

出雲井13号墳

出雲井13号墳は、出雲井12号墳と同様に本調査で新たに確認した古墳である。

本墳は、N地区の標高約89mに位置し、前述した12号墳の南側にある。出雲井13号墳は、平坦地の造成によって墳丘と埋葬施設の一部を削平されている。このため、墳丘規模・墳丘形態は不明であるものの12号墳との位置関係から小規模なものと推定できる。13号墳は、南北長2.3m・東西幅1.45mの楕円形の掘り方の中央に南北長1.5m・東西幅0.42m・現存高0.42mに小石材をコ字形に積み上げた小竪穴式石室を埋葬施設とする。石室の北壁は、2段残存する。東西の両側壁は、1～2段分の石材が残存する。横方向の石

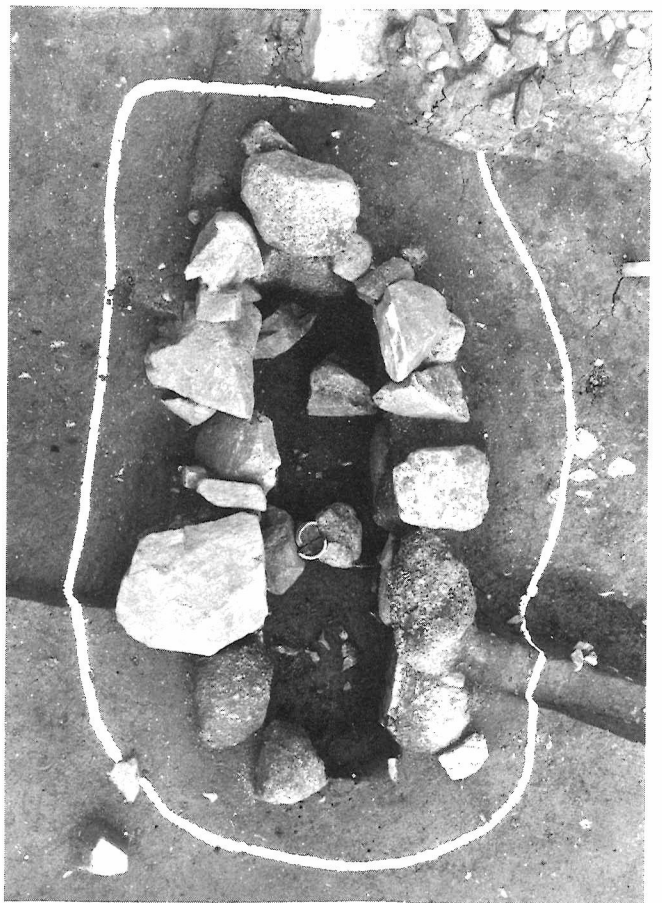


写真15 出雲井13号墳石室全景

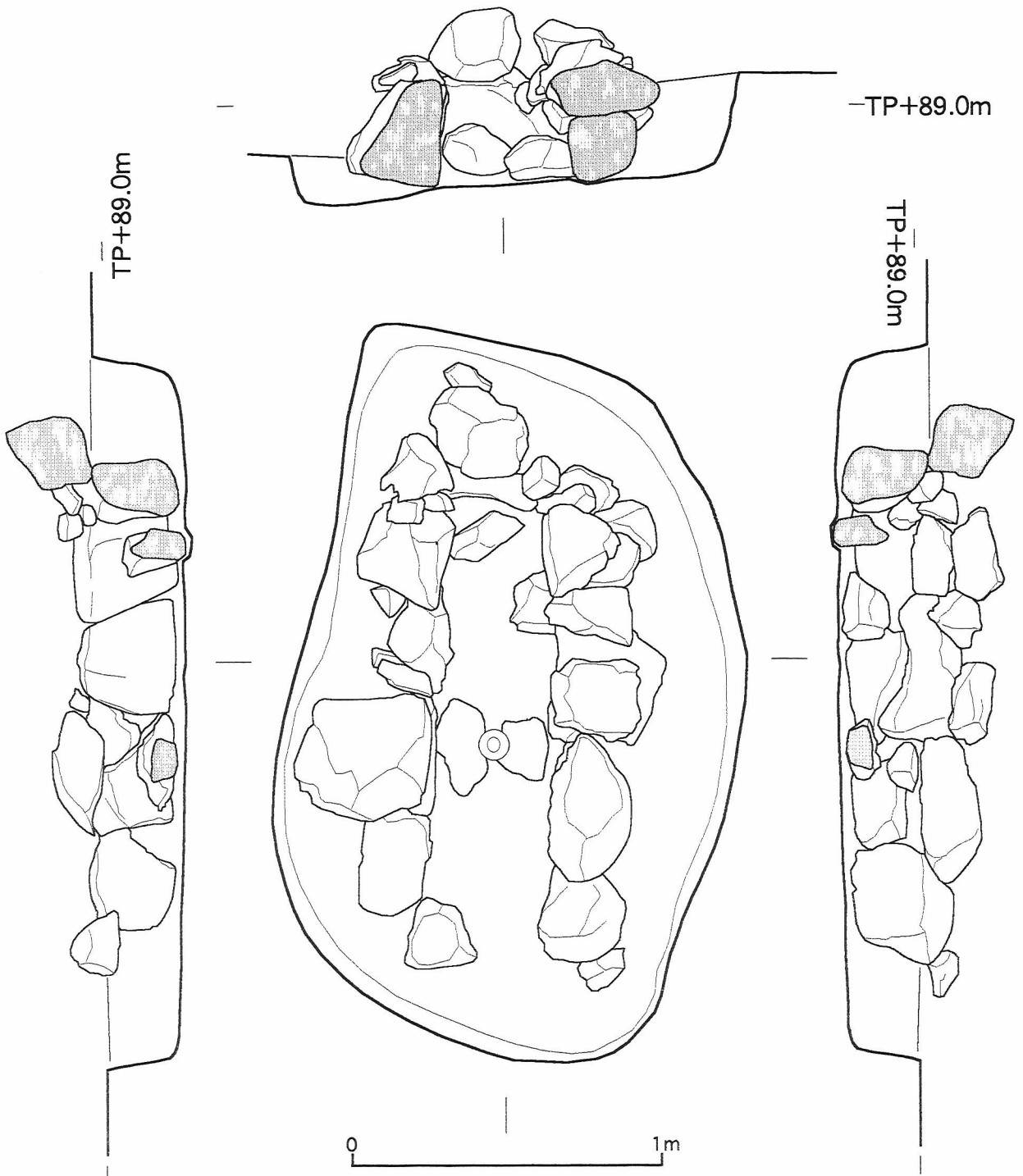
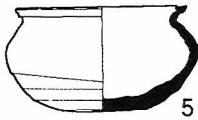


図8 出雲井13号墳の石室平面および立面



0 20cm

図9 出雲井13号墳出土遺物実測図

報告No. 005 図9	出土遺構 出雲井13号墳	種類	法量 (cm) 口径9.0 器高5.6	色調 5G7/1	調整手法	
		器種 須恵器 壺			口縁部外面 ヨコナデ	口縁部内面 ヨコナデ
					体部外面 ナデ	体部内面 ナデ
					底部外面 ヘラケズリ	底部内面 ヨコナデ

表3 出雲井13号墳出土遺物観察表

材の目地はほぼ水平に通る。床面は、平坦面を呈する。床面の北壁寄りの部分に東西方向に2石、中央からやや南寄り部分に東西方向に2石を据え置いている。このうち、南寄り部分に置かれた石の上からは、正立状態の須恵器の無頸壺1点・頭部を東に向けた鉄釘2点が出土している。このことから、13号墳の埋葬棺は、鉄釘を用いた木棺を使用したものと推定できる。なお、無頸壺は、棺台の位置から棺内に副葬されていたものと推定できる。出土している須恵器から出雲井12号墳は、ほぼ7世紀中頃の築造と推定できる。

出雲井4号墳

出雲井4号墳は、調査前から既に存在の知られていた古墳である。石室の東側部分の墳丘は、平坦地の造成によって残存せず、天井石も露出している。また、石室の西側は、平坦地の造成に伴う段によって削りとられ、西



写真16 出雲井4号墳調査前風景



写真17 出雲井4号墳石室

側壁の石材が露出するとともに一部が欠損している。現状の観察で露出していた天井石が石室内に崩落する危険性があったため、石室内全体の調査を断念し、羨道部分に限り調査を実施することにした。なお、4号墳の石室周辺は、昭和58年に発掘調査をおこなっている。

4号墳は、N地区の標高約87mにあり、後述する5号墳の東約60mに位置している。4号墳は、前述したように平坦面の造成時に削平されているため、墳丘と石室の一部が消失しているものの石室東側の平坦面で墳丘裾を巡る周溝の一部を検出している。

周溝は、幅3m・深さ1mで皿状の断面を呈する。また、周溝内の埋土からは、須恵器・土師器がまとまって出土している。周溝の内径から4号墳は、直径16m前後を測る円墳と推定できる。

4号墳の埋葬施設は、南側に向かって開口する右片袖の横穴式石室である。石室の規模は、石室残存長約9m・羨道幅1.3mを測る。石室の掘り方は、東壁の東側部分で深さ0.2mを測る。羨道部西壁にくらべると小型の石材をほぼ垂直に積み上げた羨道部東壁は、1～3段分残存している。石材の横方向の目地のとおりはわるく、凹凸が著しい。また、縦方向の目地は、千鳥



0 4m

図10 出雲井4号墳石室上面実測図



写真18 出雲井4号墳の
周溝と石室



写真19 出雲井4号墳
の羨道部分の東側壁



写真20 出雲井4号墳の
羨道部遺物出土状況

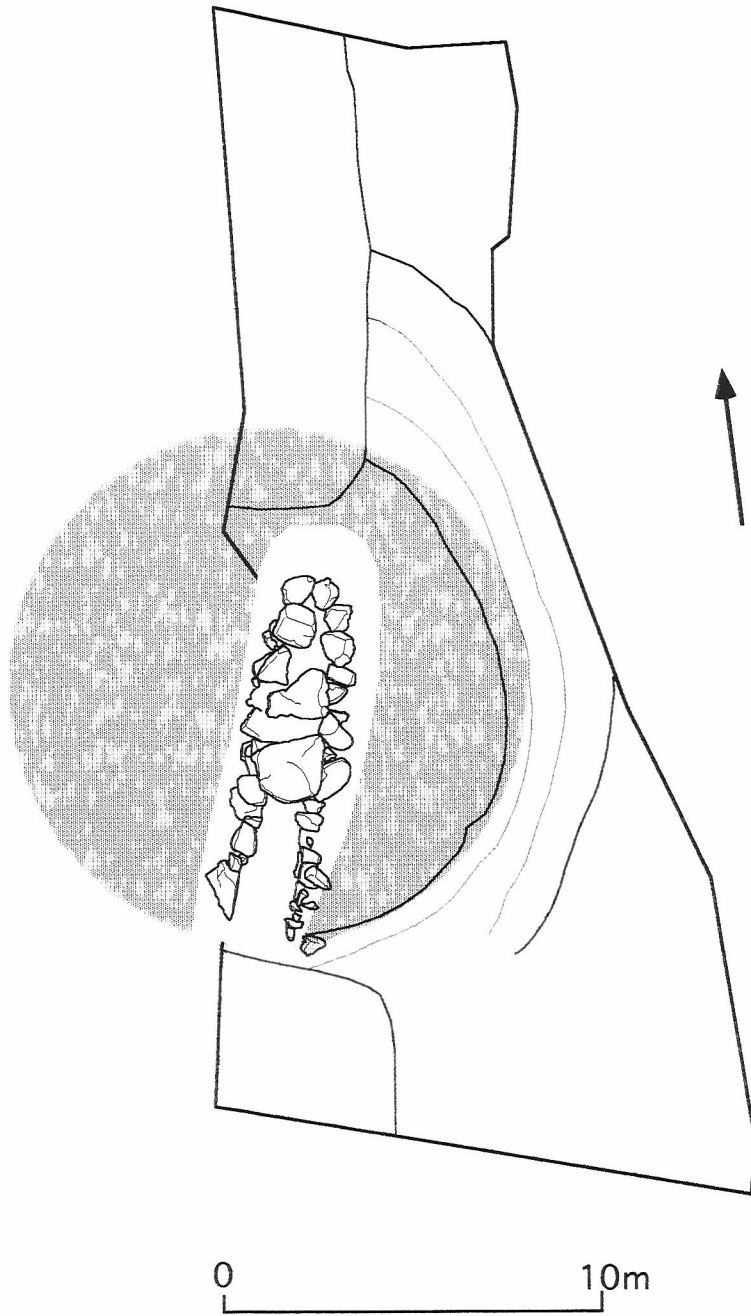


図11 出雲井4号墳周溝と石室の平面

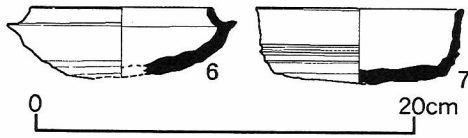


図12 出雲井4号墳出土遺物

報告No.	出土遺構	種類	法量 (cm)	色調	調整手法	
		器種			口縁部外面	口縁部内面
006 図12	出雲井04号墳	須恵器 杯	口径9.6 器高(3.6)	10BG5/1	ヨコナデ ナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ
007 図12	出雲井04号墳	須恵器	口径11.0 器高4.0	2.5GY6/1	ヨコナデ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ

表4 出雲井4号墳出土遺物観察表

状を呈する部分や直線状の部分がみられる。基底石から徐々に内傾する羨道部西壁は、基底石のほか部分的に2段目の石材が残存する。これらの石材の横方向の目地のとおりは、わるい。石室を覆う天井石は、2石残存する。羨道部床面に敷き石はみられない。

羨道部埋土内からは、須恵器坏とともに凝灰岩製の石棺片、平安時代の土師器・羽釜、黒色土器碗などが出土している。このような出土遺物から4号墳は、6世紀後半に埋葬が行われ、遅くとも平安時代には石室が開口したものと推定できる。

出雲井5号墳

出雲井5号墳は、標高約76mを測る地点に位置し、前述した4号墳の西60mにある。出雲井5号墳の墳丘は、調査前に既に流出しており、石室の天井石が露出していた。

出雲井5号墳は、昭和58年度に石室内の調査が実施されている。

石室東側の平坦面から墳丘裾を巡る周溝を検出しており、その内径から5号墳は、直径15mを測る円墳と推定できる。周溝は、幅5m、深さ1~1.5mでV字形を呈する。

5号墳は、南向きに開口する右片袖の横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。石室の規模は、玄室長4.2m・奥壁部分の幅2.2m・高2.8m、羨道部長6.4m・幅1.2m・現存高2.0mを測る。石室の掘り方は、既述したように石室が本調査完了後も現状保存されるためトレンチ調査にとどめ、その存

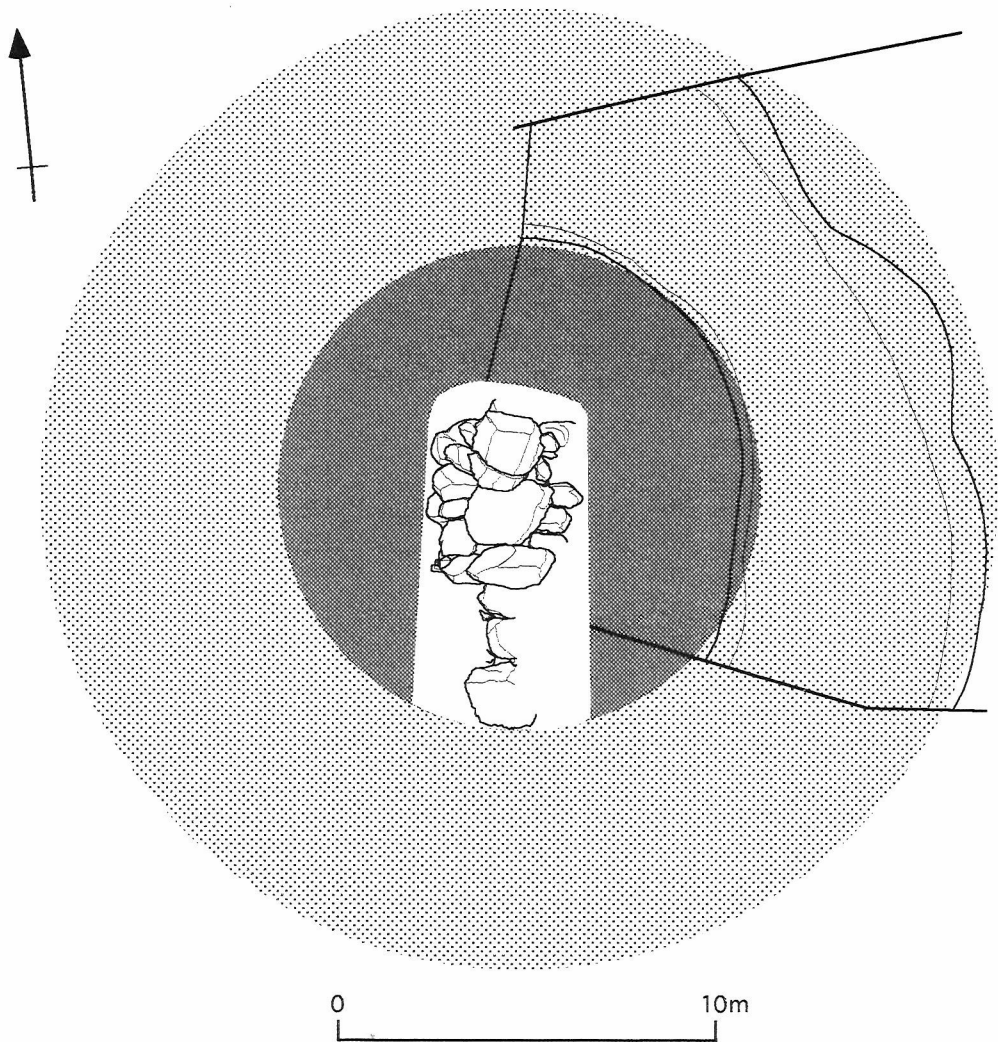


図13 出雲井5号墳
の周溝と石室



写真21 出雲井5号墳
の周溝と石室

在を確認するにとどめた。墓壙は、幅5.3m・深さ0.4~0.9mを測る。

奥壁は、基底石に横置きした3石、2段目が2石、3段目が1石で構成され、ほぼ垂直に積み上げられる。玄室の東側壁は、基底石を縦置きに据え付けたのち、2~4段目の石材を横置きし、ほぼ垂直に積み上げる。横方向の目地は、水平にとおる。垂直方向の目地は千鳥状を呈する。玄室西側壁は3段分残存し、基底石から徐々に持ち送る。石材の積み上げは、基底石を縦置きしたのち2・3段目を横置きする。羨道部の東西両側壁は、縦置きした基底石のうえに1~2段積み上げる。羨道部両側壁の横方向の目地は、玄室に比べ凹凸が著しい。玄室の天井は、3石で覆っている。玄室の床面のうち、奥壁から長さ3.3mの範囲は羨道部より約10cm高くなり、台状を呈する。台状部には、2面の敷石が認められる。第2次埋葬に伴う上面の敷石は、台状部の中央部分を除く、東西両側壁と奥壁に沿って「コ」字形に巡らせる。敷石のない中央部分は、その広

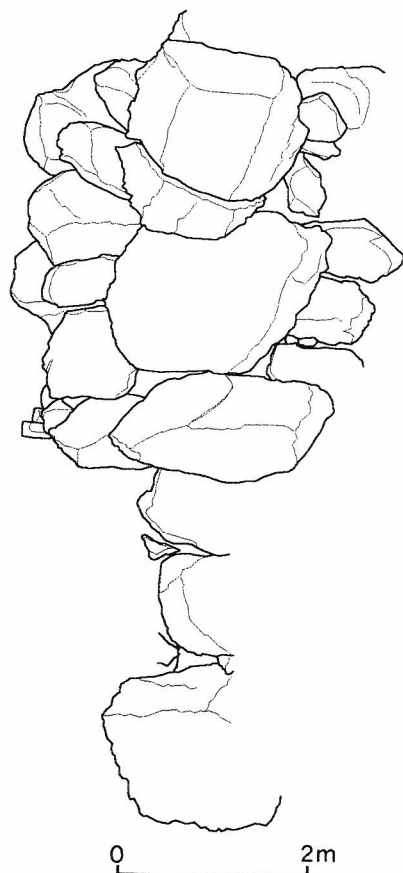
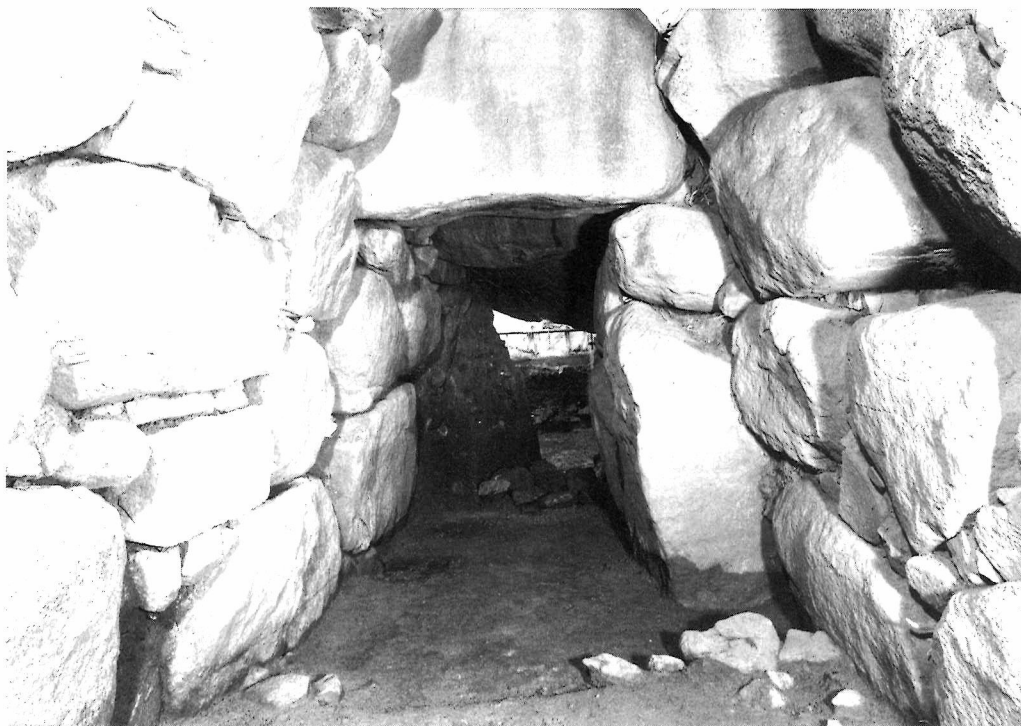


図14 出雲井5号墳上面

写真22 石室内(玄室奥から羨道部)



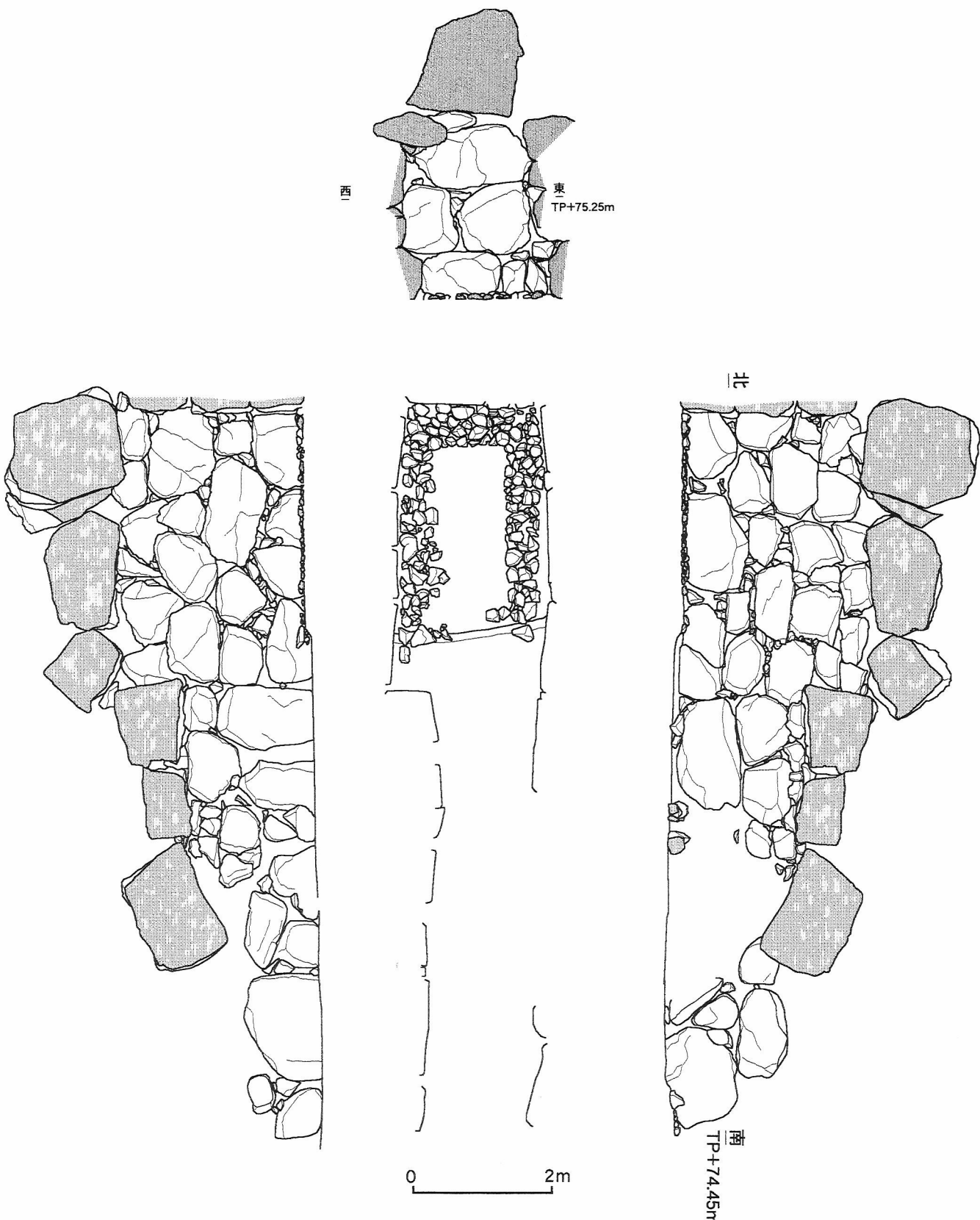


図15 出雲井5号墳の石室の平面と立面



写真23 出雲井5号墳
の玄室の西側壁



写真24 出雲井5号墳
の玄室の東側壁

さと羨道部に組み合わせ式石棺片が多数散乱していたことから石棺が据え付けられていたものと推定できる。初葬に伴う下面の敷石は台状部全域に敷き詰められる。

玄室内出土の須恵器・土師器・馬具・武具などは、第2次埋葬に伴うコ字形に巡らせた敷石の上面から検出しており、下面の敷石に伴う遺物は検出できなかった。

羨道部には閉塞施設はまったく残存していない。

羨道部からは多数の組み合わせ石棺片のほか玄室内出土の須恵器よりも



写真25 出雲井5号墳の玄室の床面の敷き石

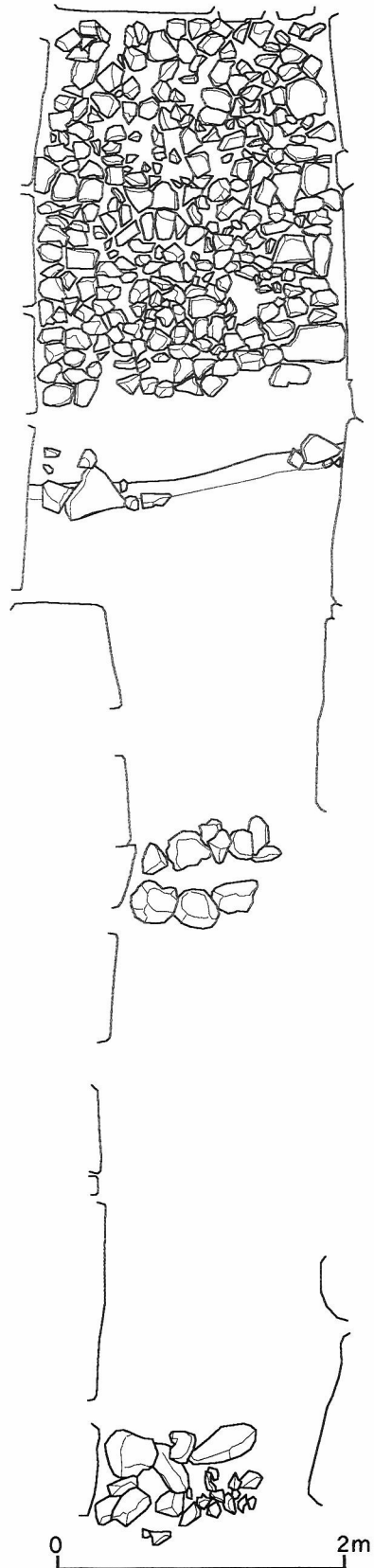


図16 出雲井5号墳の玄室の床面平面



写真26 出雲井5号墳の玄室床面の遺物出土状況



写真27 出雲井5号墳玄室床面の遺物出土状況



写真28 出雲井5号墳の羨道部分から出土した室町時代の人骨

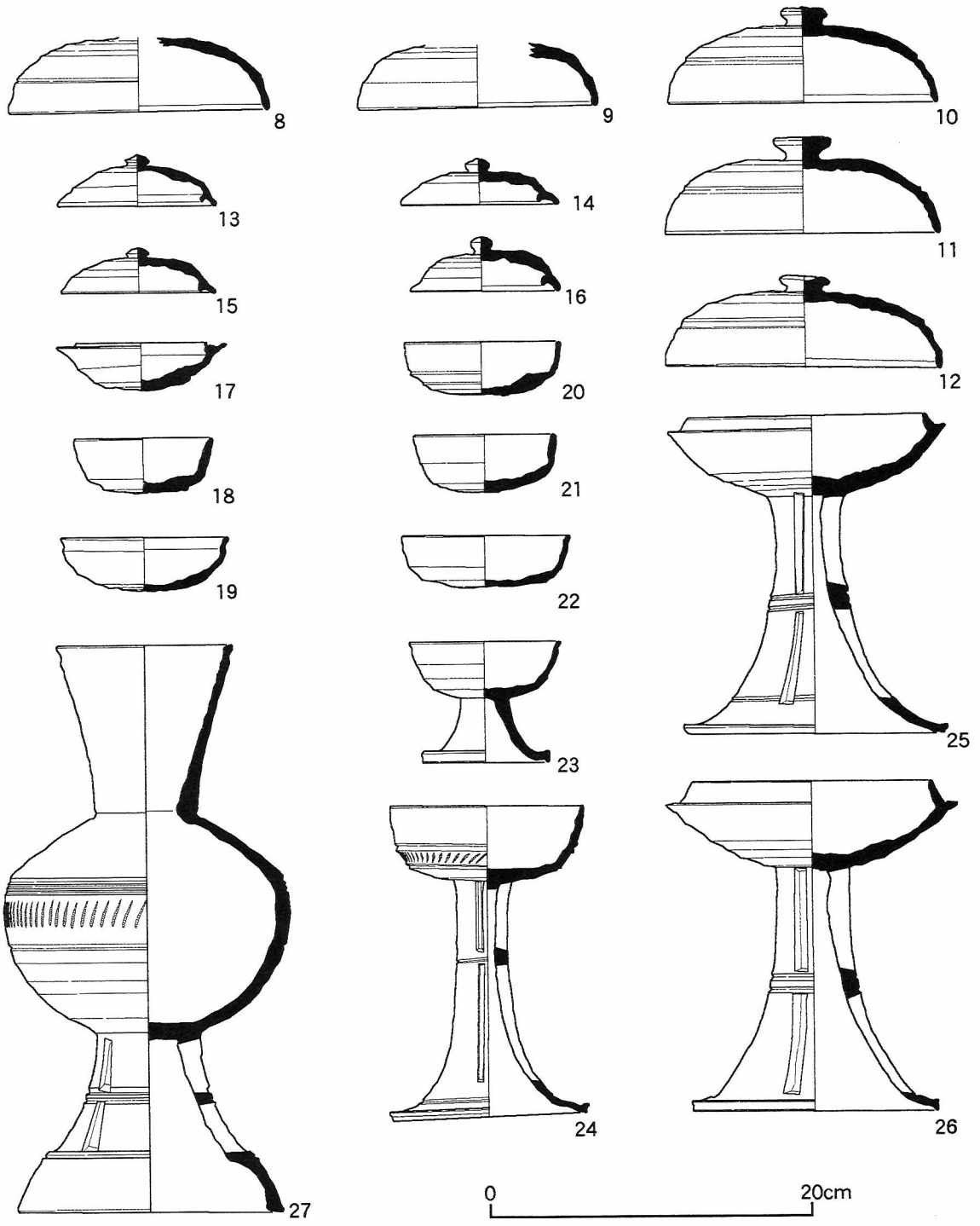


图17 出雲井5号墳出土遺物1/2

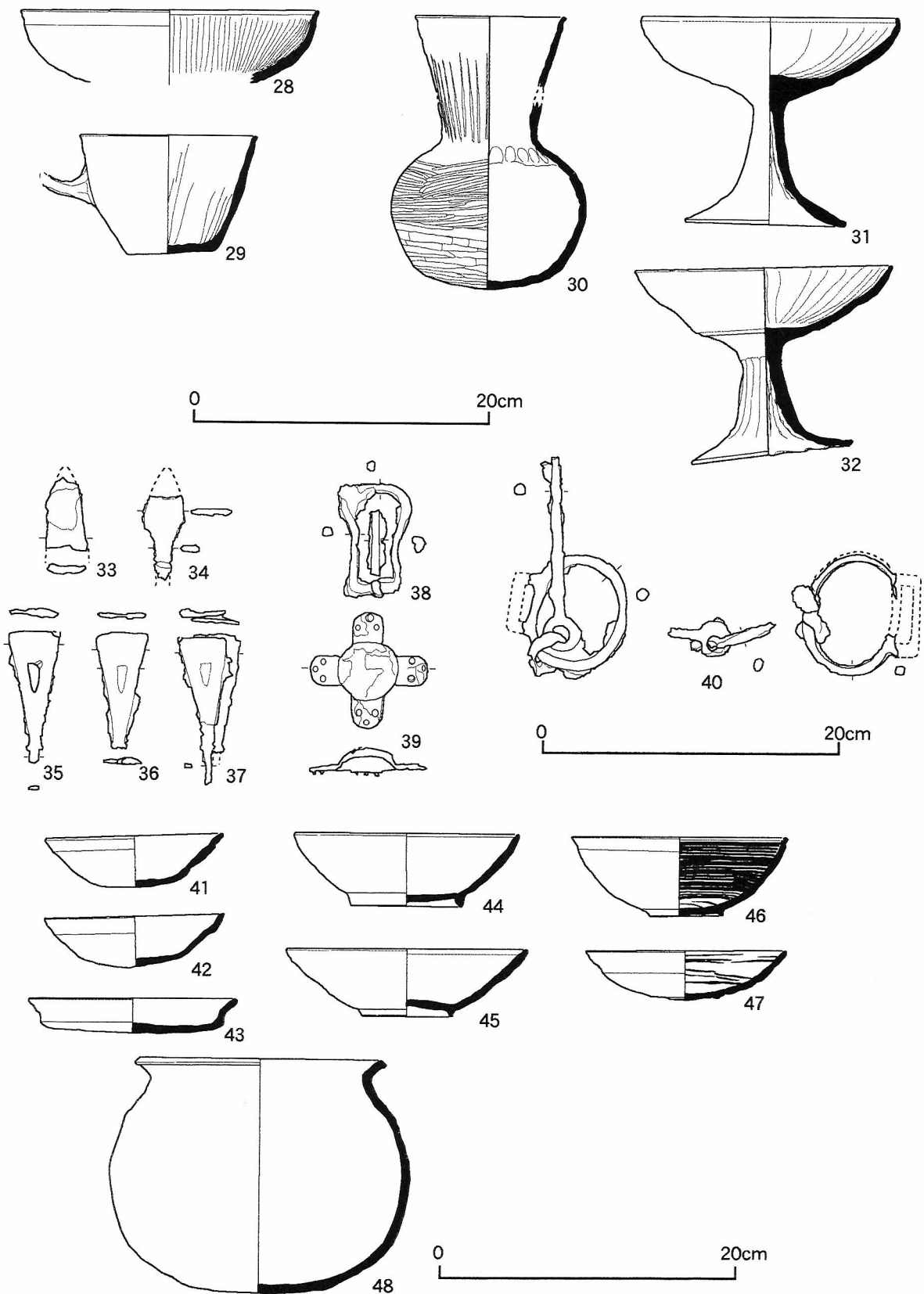


图18 出雲井5号墳出土遺物2/2

報告No.	出土遺構	種類	法量 (cm)	色調	調整手法	
		器種				
報告No.008 図 17	出雲井05号墳	須恵器 蓋	口径16 器高(4.6)		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.009 図 17	出雲井05号墳	須恵器 蓋	口径14.6 器高(4.0)		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.010 図 17	出雲井05号墳	須恵器 蓋	口径16.4 器高6.0		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.011 図 17	出雲井05号墳	須恵器 蓋	口径17.0 器高6.0		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.012 図 17	出雲井05号墳	須恵器 蓋	口径17.0 器高5.6		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.013 図 17	出雲井05号墳	須恵器 蓋	口径9.8 器高3.2		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.014 図 17	出雲井05号墳	須恵器 蓋	口径9.8 器高2.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.015 図 17	出雲井05号墳	須恵器 蓋	口径9.4 器高2.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.016 図 17	出雲井05号墳	須恵器 蓋	口径9.4 器高3.2		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ

表5 出雲井5号墳出土遺物観察表1/5

	出土遺構	種類	法量 (cm)	色調	調整手法	
		器種				
報告No. 017 図 17	出雲井05号墳	須恵器 杯	口径8 器高2.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 018 図 17	出雲井05号墳	須恵器 杯	口径8.6 器高3.4		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラキリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 019 図 17	出雲井05号墳	須恵器 杯	口径10.4 器高3.4		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラキリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 020 図 17	出雲井05号墳	須恵器 杯	口径9.6 器高3.2		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラキリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 021 図 17	出雲井05号墳	須恵器 杯	口径8.8 器高3.6		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラキリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 022 図 17	出雲井05号墳	須恵器 杯	口径10.4 器高3.2		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラキリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 023 図 17	出雲井05号墳	須恵器 無蓋高杯	口径9.4 器高7.6		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヨコナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 024 図 17	出雲井05号墳	須恵器 無蓋高杯	口径11.8 器高19.2		口縁部外面 ヨコナデ 列点文 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヨコナデ 長方形2段3方透かし	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 025 図 17	出雲井05号墳	須恵器 有蓋高杯	口径14.6 器高19.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヨコナデ 長方形2段3方透かし	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ

表5 出雲井5号墳出土遺物観察表2/5

報告No.	出土遺構	種類	法量 (cm)	色調	調整手法	
		器種				
報告No.026 図 17	出雲井05号墳	須恵器 有蓋高杯	口径14.8 器高20.4		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヨコナデ 長方形2段3方透かし	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.027 図 17	出雲井05号墳	須恵器 脚付壺	口径10.6 器高35.2		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 列点文 底部外面 ヨコナデ 長方形2段3方透かし	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No.028 図 18	出雲井05号墳	土師器 杯	口径20.0 器高4.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデのち放射状 暗文 底部内面
報告No.029 図 18	出雲井05号墳	土師器 把手付鉢	口径11.8 器高8.0		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ナデ
報告No.030 図 18	出雲井05号墳	土師器 壺	口径10.0 器高(18.4)		口縁部外面 ヨコナデのち縦方向の 暗文 体部外面 ナデのち横方向のヘラ ミガキ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ナデ
報告No.031 図 18	出雲井05号墳	土師器 高杯	口径17.0 器高14.0		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ナデ ヨコナデ	口縁部内面 ヨコナデのち放射状 の暗文 体部内面 ヨコナデ 底部内面 シボリメ ヨコナデ
報告No.032 図 18	出雲井05号墳	土師器 高杯	口径17.2 器高12.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ナデ ヨコナデ	口縁部内面 ヨコナデのち放射状 の暗文 体部内面 ヨコナデ 底部内面 シボリメ ヨコナデ
報告No.033 図 18	出雲井05号墳	鉄製品 鉄鏝	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No.034 図 18	出雲井05号墳	鉄製品 鉄鏝	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面

表5 出雲井5号墳出土遺物観察表3/5

	出土遺構	種類	法量 (cm)	色調	調整手法	
		器種				
報告No. 035 図 18	出雲井05号墳	鉄製品 鉄鏃	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 036 図 18	出雲井05号墳	鉄製品 鉄鏃	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 037 図 18	出雲井05号墳	鉄製品 鉄鏃	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 038 図 18	出雲井05号墳	馬具 か具	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 039 図 18	出雲井05号墳	馬具 辻金具	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 040 図 18	出雲井05号墳	馬具 轡	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 041 図 18	出雲井05号墳	土師器 杯	口径12.0 器高3.4		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ナデ
報告No. 042 図 18	出雲井05号墳	土師器 杯	口径12.2 器高3.4		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ナデ
報告No. 043 図 18	出雲井05号墳	土師器 皿	口径16.2 器高15.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ナデ

表5 出雲井5号墳出土遺物観察表4/5

	出土遺構	種類	法量 (cm)	色調	調整手法	
		器種				
報告No.044 図18	出雲井05号墳	黒色土器 椀	口径15.0 器高4.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ヨコナデ ナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ヨコナデ ナデ
報告No.045 図18	出雲井05号墳	黒色土器 椀	口径16.2 器高4.6		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ヨコナデ ナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ヨコナデ ナデ
報告No.046 図18	出雲井05号墳	瓦器 椀	口径14.4 器高5.2		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ヨコナデ ナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデのち横方向 のヘラミガキ 底部内面 ナデのち横方向の渦 巻状暗文
報告No.047 図18	出雲井05号墳	瓦器 椀	口径13.4 器高3.2		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデのち横方向 のヘラミガキ 底部内面 ナデ
報告No.048 図18	出雲井05号墳	土師器 甕	口径16.2 器高15.8		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ナデ 底部外面 ナデ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ナデ

表5 出雲井5号墳出土遺物観察表5/5

新しい7世紀前半の特徴を示す須恵器や土師器・鉄釘が出土している。したがって、第3次埋葬では鉄釘を使った木棺が使用されたものと推定できる。このようなことから、5号墳は少なくとも3回の埋葬が行われたものと推定できる。

羨門付近の堆積土層からは、平安時代の黒色土器のほか13世紀代の瓦器・土師器とともに埋葬された人骨を検出している。

出雲井14号墳

N地区の標高約78mにある出雲井14号墳は、本調査で新たに検出したものである。出雲井14号墳の位置は、前述した出雲井5号墳の南南東約40m、4号墳の南南西30mにある。出雲井14号墳は、平坦面の造成時に削平されているため、墳丘裾部分を巡る周溝と石室の下部が残存するにすぎないものの、周溝の内径から直径15mの円墳と推定できる。

周溝は、幅2~4m・深さ0.2~1.3mを測り、周溝底面から須恵器が出土している。

出雲井14号墳の埋葬施設は、南に向かって開口する

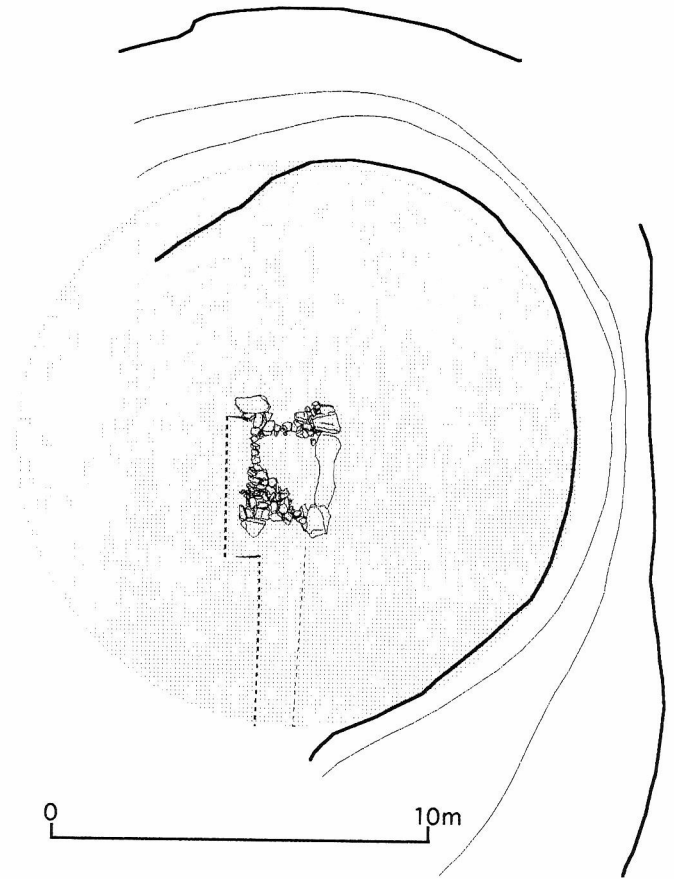
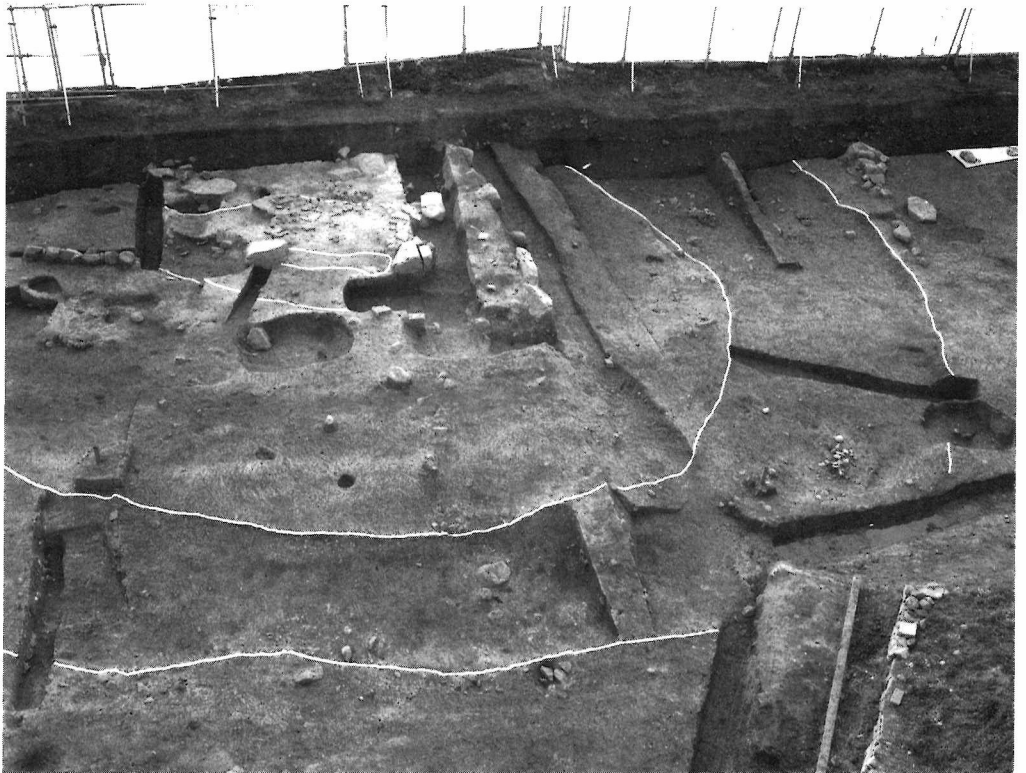


図19 出雲井14号墳周溝と石室

写真29 出雲井14号墳周溝と石室



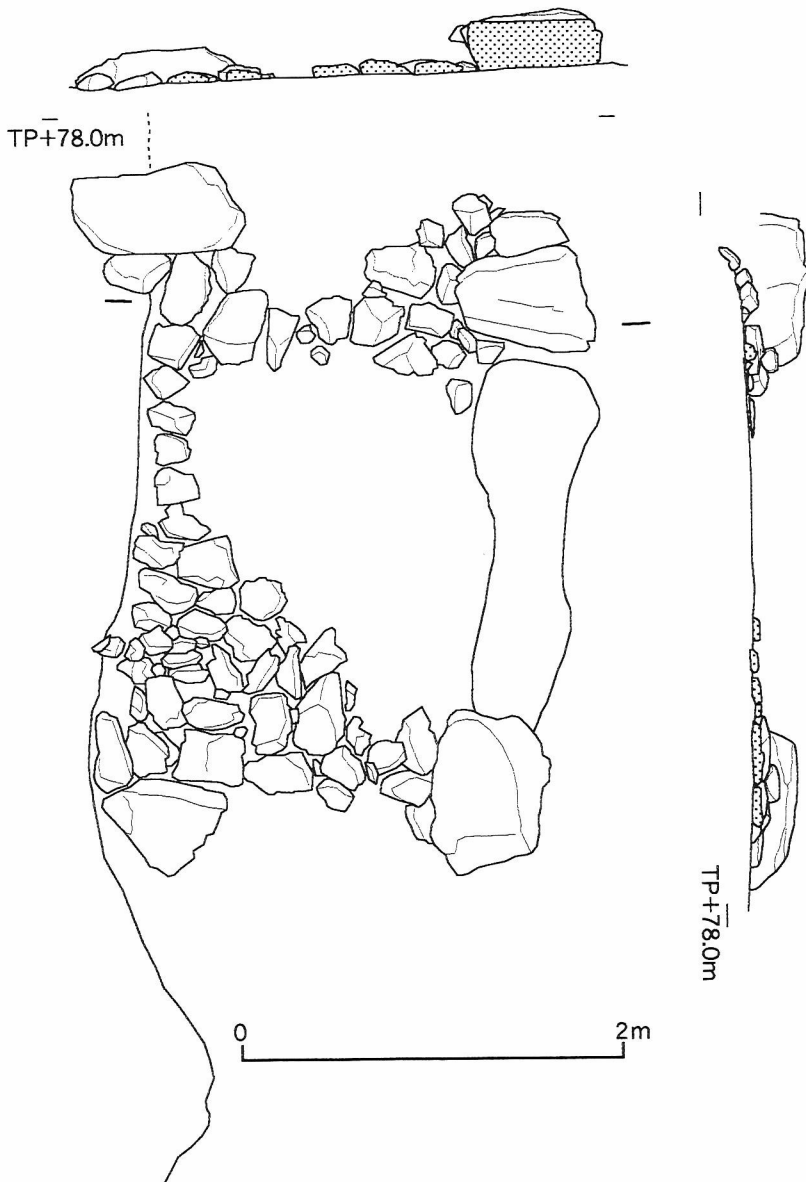


図20 出雲井14号墳石室の平面

横穴式石室で、側壁および奥壁の基底石の一部と床面の敷石の一部だけが残存している。このため、石室の全形態は不明である。石室の残存規模は東西幅1.4m・南北長1.77m・高さ0.16mを測る。石室の壁面の構築に用いる石材は、4～6号墳と比べるとやや小型である。奥壁は、西寄り部分にあたる基底石が1石残存しているのみで他の石材は残存しない。東側壁あたる部分には、東西0.25～0.35m・南北1mの抜き取り穴が検出されており、その両端に基底石が1石ずつ残存している。西側壁は石室西側の段によって削り取られ、残存していない。南寄りの地点にやや大型の石材が1石残存しているが、原位置をとどめていない。床面のうち西寄り部分は、西側壁同

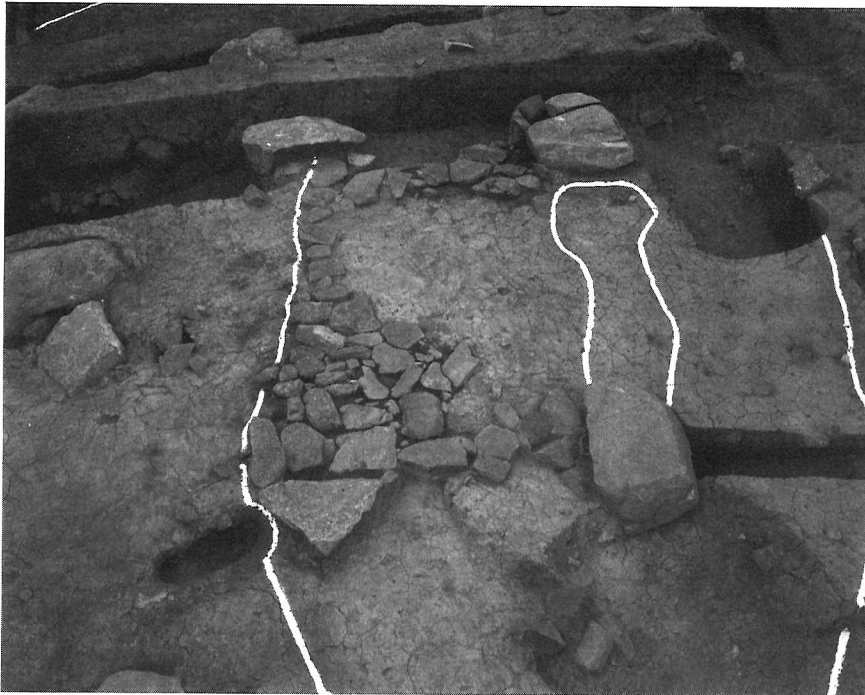


写真30 出雲井14号墳の石室検出状況



写真31 出雲井14号墳の周溝内須恵器出土状況

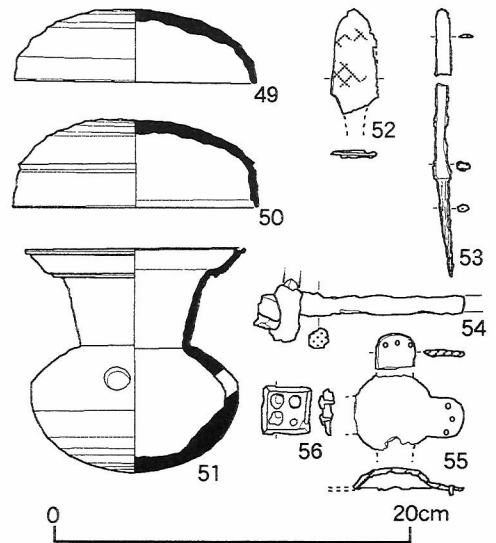


図21 出雲井14号墳出土遺物実測図

様に削り取られ、残存していない。床面には敷き石が施されていたものの、前述した東側壁沿いの抜き取り穴周辺には残存していない。敷き石の凹凸は12号墳と比較するとすくない。敷石の上面からは、須恵器・馬具・玉類・鉄釘を検出している。鉄釘が出土していることから14号墳には、鉄釘によって組み合わせた木棺が使われていたものと推定できる。

周溝内から出土している須恵器は、MT15型式～TK10型式であることから、14号墳は出雲井古墳群の中で最も古い6世紀中頃の古墳と推定できる。

	出土遺構	種類	法量 (cm)	色調	調整手法	
		器種				
報告No. 049 図 21	出雲井14号墳	須恵器 蓋	口径13.4 器高4.0	N3/	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 050 図 21	出雲井14号墳	須恵器 蓋	口径13.6 器高5.0	5BG7/1	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 051 図 21	出雲井14号墳	須恵器 はそう	口径12.2 器高12.6		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ	口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ 底部内面 ヨコナデ
報告No. 052 図 21	出雲井14号墳	鉄製品 鉄鉢	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 053 図 21	出雲井14号墳	鉄製品 鉄鉢	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 054 図 21	出雲井14号墳	馬具 轡	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 055 図 21	出雲井14号墳	馬具 辻金具	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面
報告No. 056 図 21	出雲井14号墳	馬具 飾り金具	口径 器高		口縁部外面 体部外面 底部外面	口縁部内面 体部内面 底部内面

表6 出土遺物観察表

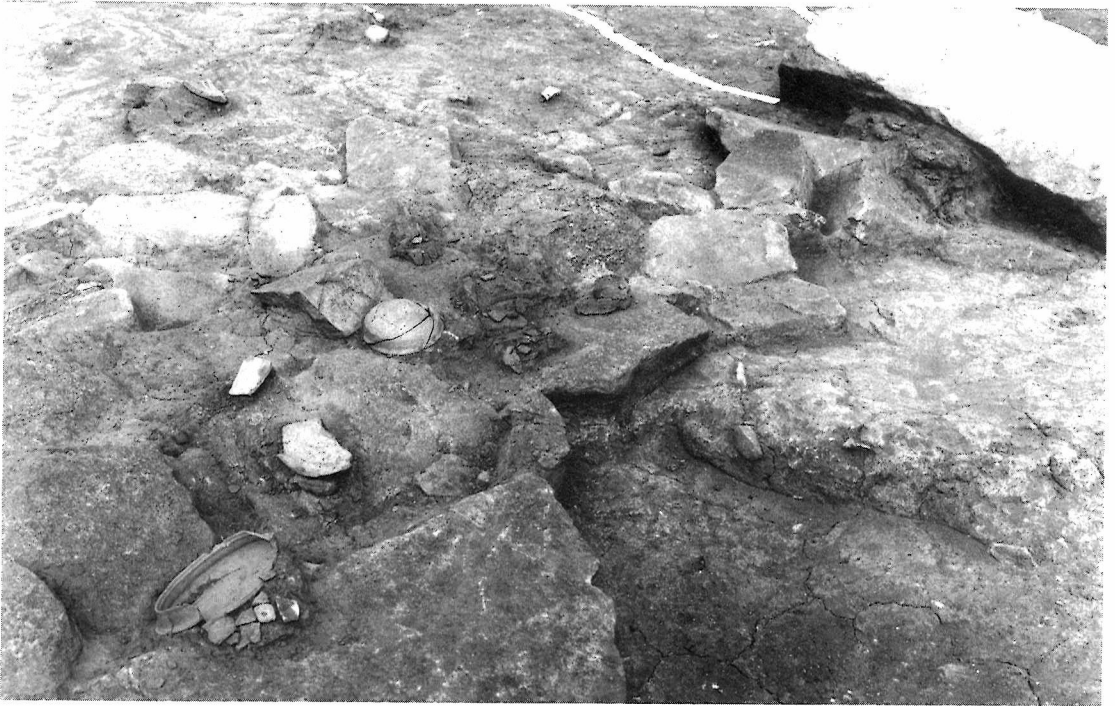


写真32 出雲井14号墳の石室
床面の遺物出土状況



写真33 出雲井14号墳の床面
の馬具出土状況

その他の遺構と遺物

本調査では、前述してきた古墳時代後期の古墳のほか、鎌倉時代から室町時代の遺物や柱穴・土壇・火葬施設などの遺構を検出している。これらの遺構は、調査区中央部に位置する平坦面で検出されており、著しい削平によって成形された調査区東寄りおよび西寄りの平坦面からは遺構は確認されていない。遺構内には細片化した瓦器・土師器・陶磁器類が出土しているものもあるが、時期を確定できるものはない。柱穴には、直径20cm前後を測るものが多く、柱根の残存するものも検出している。建物の復元にはいたらなかった。



写真34 火葬施設

N5地区では、南北方向に長軸をとる隅丸長方形を呈する土壇を検出している。土壇の中央部分は、主軸に沿って一段深くなり、凹状の断面形を呈する。壁面および底面は、全体に熱によって赤変している。施設の埋土には多量の炭がみられるものの他の遺物はまったく出土していない。このような施設は、

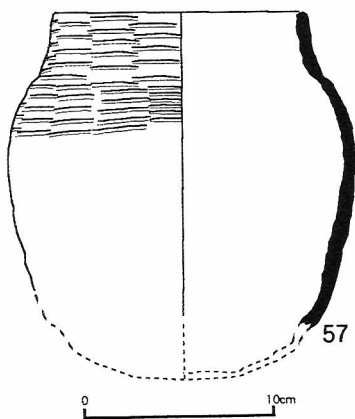


図22 製塩土器実測図

奈良県榛原町谷畑中世墓地・能峠南山中世墓地・シメン坂中世墓地、大宇陀町チクマ中世墓地などに類例があり、13世紀～14世紀の火葬施設と推定されている。これらのなかには、施設内に火葬後の骨を集めて埋納した火葬施設兼火葬墓としたものも認められる。本例は、施設内から火葬骨をまったく検出していないことから、火葬施設として使用し、火葬骨を別に埋納したものと推定できる。

4号墳の周辺からは、形態や製作手法から6世紀中～後半に瀬戸内地域で製作された製塩土器が出土している。

報告No.057 図 22	出土遺構	種類	法量 (cm)	色調	調整手法	
		器種			口縁部外面	口縁部内面
		土器 製塩土器	口径13.0 器高(16.0)		横方向の平行タタキメ	ヨコナデ
					体部外面 横方向の平行タタキメ	体部内面 ナデ
					底部外面	底部内面

表7 製塩土器観察表

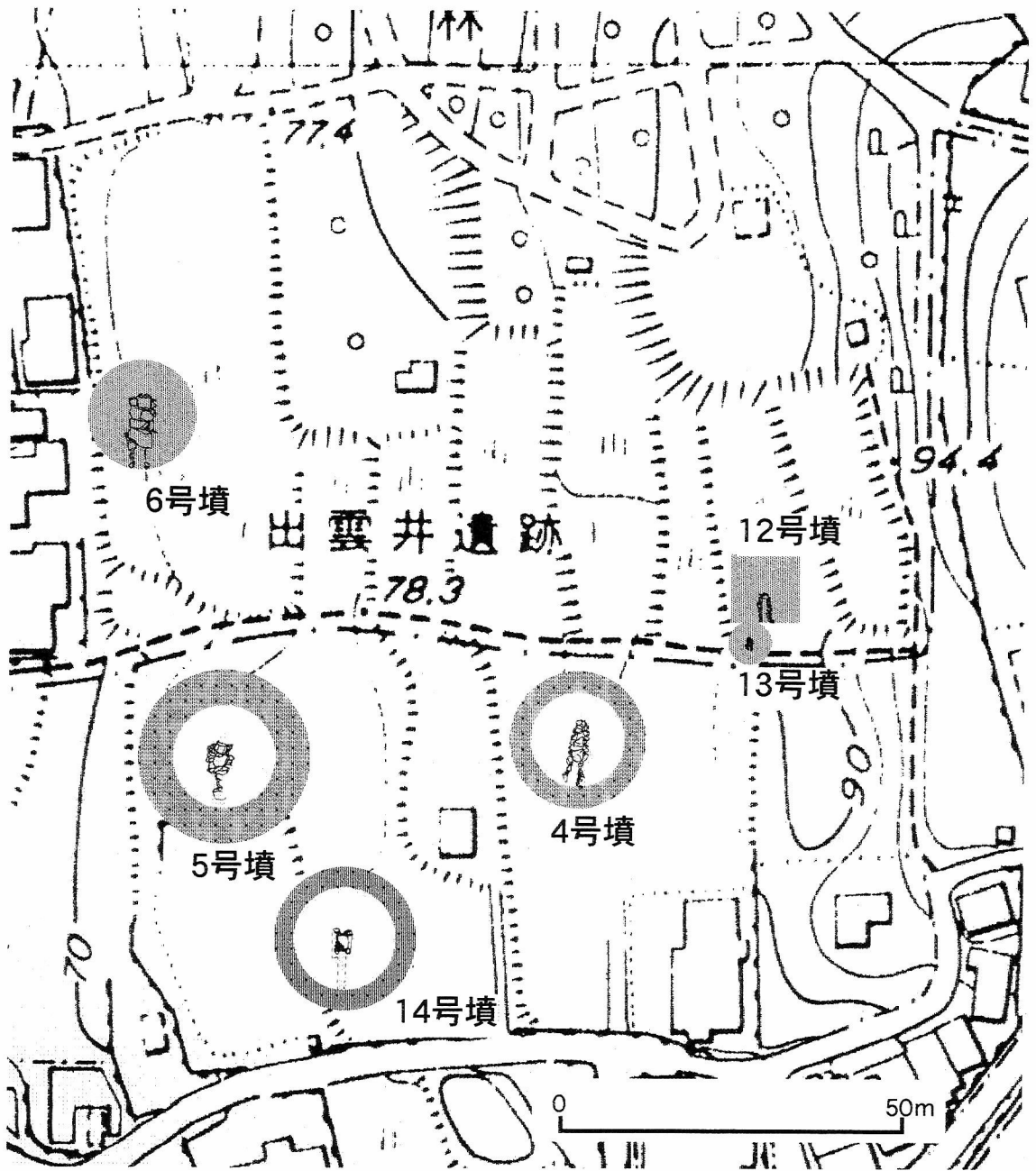


図23 調査区内の古墳の分布

IV まとめ

本調査では、既知の3基(4・5・6号墳)の古墳とともに、新たに3基の古墳(12・13・14号墳)を確認できた。このうち、天井石ののこる4・5・6号墳のうち、4・6号墳は天井石の崩落するおそれがあったため、玄室内の調査を実施できず、十分なデータを得ることができなかった。ここでは、本調査の成果とともに出雲井古墳群を構成する各古墳のデータを提示し、墳

古墳名	墳丘(m)	主体部	主体部形態	主体部規模(m)	埋葬棺	種類	器種	時期	備考	
出雲井1号墳	墳形 墳丘規模 墳丘高			全長 玄室長 玄室幅 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高					
出雲井2号墳	墳形 墳丘規模 墳丘高			全長 玄室長 玄室幅 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高					
出雲井3号墳	墳形 墳丘規模 墳丘高			全長 玄室長 玄室幅 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高					
出雲井4号墳	墳形 円墳 墳丘規模 16 墳丘高	横穴式石室	右袖	全長 玄室長 玄室幅 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高	石棺	須恵器 土師器 黒色土器 瓦器 鉄釘	杯 埴 羽釜 埴	TK209~	周溝
出雲井5号墳	墳形 円墳 墳丘規模 15 墳丘高	横穴式石室	右袖	全長 玄室長 4.2 玄室幅 2.2 玄室高 2.8	羨道長 6.4 羨道幅 1.2 羨道高 2.0	石棺	須恵器 土師器 黒色土器 瓦器 金属製品	杯 蓋 有蓋高杯 無蓋高杯 有 蓋脚付壺 杯 長頸壺 高杯 把手付鉢 皿 甕 埴 黒色土器 瓦器 金属製品 鉄 鐵 馬具 鈔 耳環	MT85~飛鳥I	周溝 敷石
出雲井6号墳	墳形 墳丘規模 墳丘高	横穴式石室	左袖	全長 玄室長 玄室幅 2.4 玄室高 3.0	羨道長 羨道幅 1.8 羨道高 1.4	石棺	須恵器		TK209?	
出雲井7号墳	墳形 円墳 墳丘規模 墳丘高	横穴式石室	右袖	全長 玄室長 3.5 玄室幅 1.5 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高	木棺	須恵器 土師器 瓦器 金属製品 鉄釘	杯 蓋 無蓋高杯 器台 提瓶 はそう 甕 有蓋脚付壺 杯 皿 埴 皿 三足釜 耳環 大刀 鉄 鐵 ガラス玉 管玉 白玉 なつめ玉	TK10~MT85	敷石
出雲井8号墳	墳形 円墳 墳丘規模 20 墳丘高 3	横穴式石室	両袖	全長 玄室長 5.2 玄室幅 2.6 玄室高 4.0	羨道長 3.2 羨道幅 1.7 羨道高 1.9	石棺			TK209?	
出雲井9号墳	墳形 墳丘規模 墳丘高			全長 玄室長 玄室幅 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高					
出雲井10号墳	墳形 墳丘規模 墳丘高			全長 玄室長 玄室幅 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高					

表8 出雲井古墳群一覽1/2

古墳名	墳丘(m)	主体部	主体部形態	主体部規模(m)	埋葬棺	種類	器種	時期	備考
出雲井11号墳	墳形 墳丘規模 墳丘高			全長 玄室長 玄室幅 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高				
出雲井12号墳	墳形 方墳 墳丘規模 墳丘高	横穴式石室	無袖	全長 玄室長3.2 玄室幅 1.0 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高	木棺	須恵器 土師器 蓋 盃 盃	飛鳥I～飛鳥II	敷石 棺台
出雲井13号墳	墳形 墳丘規模 墳丘高	竪穴式小石室		全長 1.5 玄室長 玄室幅 0.4 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高		須恵器 短頸壺	飛鳥II	
出雲井14号墳	墳形 円墳 墳丘規模 15 墳丘高	横穴式石室		全長 玄室長 玄室幅 玄室高	羨道長 羨道幅 羨道高		須恵器 金属製品 玉類 鉄釘 蓋 はそう 馬具(轡 辻金具) 鉄鍔	MT15～	周溝 敷石

表8 出雲井古墳群一覧2/2

		MT15	TK10	MT85	TK209	飛鳥I	飛鳥II
北群	7号墳	↔					
南群	14号墳	←					
	5号墳		↔				
	4号墳				↔		
	6号墳				←---		
	8号墳				←---		
	12号墳					↔	
	13号墳						←---

表9 出雲井古墳群の変遷

丘・外部施設・埋葬施設・埋葬棺・副葬品についてまとめてみたい。
 出雲井古墳群では、本調査を含め14基の古墳を確認している。これらの古墳は、中世以降の土地の平坦地化によって削平されている。このため、既に破壊された古墳や未発見の古墳がさらに多数存在するものと想定できる。しかしながら、本古墳群の南側に占地する約100基の山畑古墳群や約300基の高安古墳群、さらに1500基以上といわれる平尾山古墳群と比較すれば出雲井古墳群は、少数の古墳からなりたつ群集墳といえる。

出雲井古墳群は、その分布範囲のほぼ中央を東西方向に横切る小支谷によって北群(1～3・7・10・11号墳)6基と南群(4・5・6・8・9・12・13・14号墳)8基から成り立っている。本調査では南群の6基が調査対象となった。各々の古墳出土の須恵器から北群の古墳は、標高200m～60mに分布している。北群の古墳は、調査例が少ないものの、7号墳にTK10型式の須恵器

が副葬されていることから、6世紀中頃から群形成がはじまっている。南群の古墳は、北群にくらべやや低位置の100m～40mに分布しており、6世紀中頃に築造を開始し、6世紀後半に築造のピークをむかえ、7世紀前半頃まで古墳の築造が継続している。本調査区に限ってみれば、古墳は南西から北東方向へ順次築造されていく。このように7世紀前半以降も新たな古墳の築造が継続するのは、本古墳群の周辺にある他の群集墳では確認されていない。7世紀代になって新たに築造をはじめた古墳は、墓尾古墳群のようにそれまでとは別地点で群形成を開始したり、イノラムキ古墳のように単独で営まれるものもある。

墳丘

出土している須恵器から6世紀代に築造されたと考えられる古墳の墳形は、すべて円墳である。その後7世紀代の築造と推定される古墳(13号墳)に方墳が含まれる。後述する本古墳群で最大規模の両袖の石室を埋葬施設とする8号墳(松本塚)は、直径20mを測る。他の墳丘規模の判明しているものは、直径15m前後で等質的である。これらのことは、円墳や方墳のほか双円墳・上円下方墳など様々な墳形の古墳を含む山畑古墳群とは対照的である。

外部施設

本調査で新たに確認した3基の古墳は、平坦地の造成に伴う削平によって墳丘の盛り土は、まったく残存していない。また、既知の3基の古墳も調査前にいずれも天井石が露出しており、盛り土を確認ではきなかった。墳丘裾に巡っていた周溝を3基の古墳(4号墳・5号墳・14号墳)で確認している。周溝は、幅2m～5m、深さ1mを測る。周溝の底面は、東側が浅く、西側を深く掘削している。

埋葬施設

各古墳の埋葬施設は、南群・北群とも群形成の当初から一貫して横穴式石室を採用している。さらに、7世紀代には、竪穴式小石室が加わってくる。横穴式石室とともに木棺直葬墳が造営される柏原市太平寺古墳群のような古墳群の成立と展開過程とは異なっている。また、現在までの調査では、竪穴系横口式石室も確認されていない。

出雲井古墳群の横穴式石室には、右片袖・左片袖・両袖・無袖の形態のものがある。右片袖が多く、他の古墳群と同様の傾向をしめす。片袖の横穴式石室は群形成の当初から確認できるのに対し、両袖の石室は遅れ6世紀末、さらに7世紀代になって無袖のものがあらわれる。

横穴式石室の規模を石室形態ごとに比較してみると、両袖の石室(8号墳)が最も大きく、両袖の石室(12号墳)は小規模である。

片袖の玄室の平面形は、長方形を呈する。5号墳は、玄室幅が2mを超え

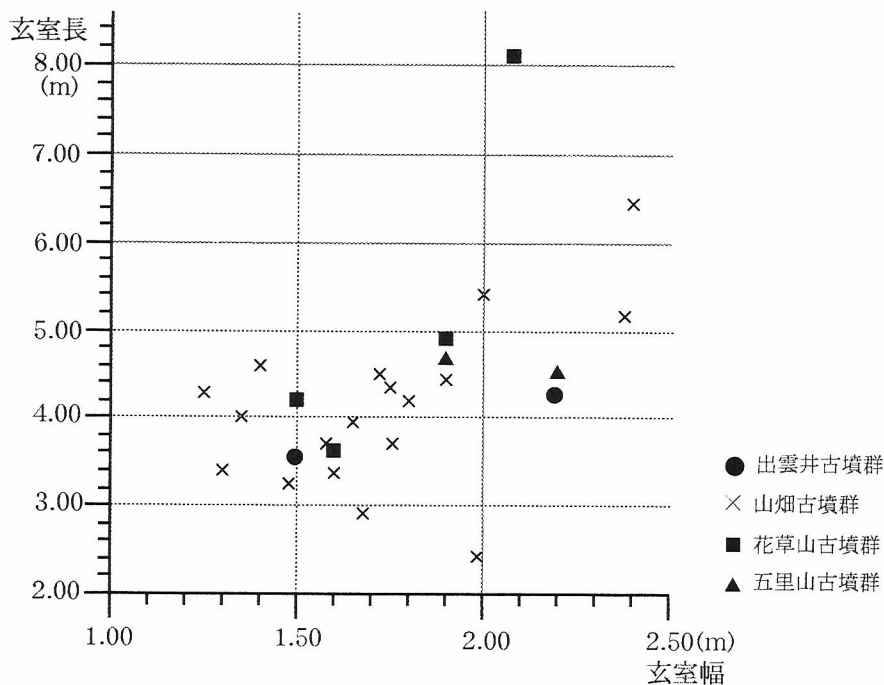


表10 片袖石室の玄室の長さと同幅

ており、玄室幅指数52.4で幅広の長方形を呈する。

石室の構築に使用する石材は、群形成の初期には小型の石材を使用しているが、6世紀後半には大型のものが使われる傾向がある。奥壁は、ほぼ垂直に3～4段積み上げる。6世紀後半の奥壁の基底石には2～3石を配置しているが、6世紀末頃には、1石のものがあらわれる。側壁は、やや持ち送り気味に4～5段積み上げる。6世紀後半までは基底石を横置きしているのに対して6世紀末には縦置きした基底石も認められる。

玄室床面には、平らな面を上向きに敷き詰めた敷き石が認められる。7世紀代の石室床面にも敷き石が認められるが、凹凸が著しい。閉塞状況の残存している古墳はないが、14号墳では石室で入り口付近に拳大の石が散乱していることから、これらの石を積み上げていたものと推定できる。また、5号墳では、羨道部奥部分で第3次埋葬が認められることから、羨道部の羨門寄りに閉塞施設があったものと推定できる。

12号墳の横穴式石室の出入り口部分に近接して構築された13号墳の埋葬施設は、前述したように小型の竪穴式小石室である。竪穴式小石室は、本例のほかのみかん山古墳群・山畑古墳群・六万寺古墳群・皿池遺跡などでも確認されている。このうち、みかん山古墳群と六万寺古墳群では、出雲井13号墳と同様に横穴式石室を埋葬施設とする古墳の墳丘裾付近にある。また、山畑25号墳では、横穴式石室の主軸と平行する方向で墳丘内に構築されている。

5号墳の玄室は横置きした石材を4～5段積み上げて側壁や奥壁を構築している。一方、6号墳の玄室の側壁は基底石を縦置きし2段目以上を横置きして積み上げている。同一古墳群内にみられるこのような石材の積み上げ法の差異は時間差を反映しているものと推定できる。

5号墳の玄室の平面形態・規模は、山畑22号墳西石室とほぼ同一である。

埋葬棺

埋葬棺には、鉄釘を用いた木棺と組み合わせ式石棺が認められる。木棺は群形成の当初から最後まで使われているのに対し、石棺は7世紀代に築造された無袖の12号墳には使用されていない。

木棺を組み合わせる際に使用された鉄釘に残る木目の痕跡から木棺は、幅3cm前後の板を組み合わせたと推定できる。木棺の大きさは、鉄釘の出土位置や棺台の配置から長さ2m・幅0.6m程度と推定される。また、石棺は肉眼観察ですべて凝灰岩製で、他の石材のものはない。5号墳の玄室床面の敷き石の状況から、石棺は長さ2.4m・幅1m程度と推定される。同一古墳でも木棺と石棺は、混在する。

埋葬棺は、いずれも石室の主軸と平行に配置されており、直交するものはない。

竪穴式小石室内からは、鉄釘が出土していることから組み合わせ式の木棺が納められていたものと推定できる。このほか、皿池遺跡で確認されている竪穴式小石室では、土師器羽釜と甕の口縁部を合わせて棺としている。

副葬品

副葬品には、土器類のほか馬具・武具・装身具が認められる。これらのなかで土器類は一貫して副葬されるものの、馬具・武具・装身具類は、6世紀末以降確認されていない。

5号墳で石棺を埋葬棺とする第2次埋葬時に副葬されたと推定できる須恵器には、杯・蓋のセットが認められない。一方、これを補うかのように長脚2段透かしの有蓋高杯と蓋が多数出土している。このような須恵器の構成は出雲井5号墳のほか、山畑33号墳・山畑48号墳でも看守できる。副葬する須恵器の器種構成の差異は群集墳を構成する各古墳の特性や同一古墳に葬られた被葬者の特徴を示すものと推定できる。

なお、竪穴式小石室からも須恵器をはじめ刀子の出土することも確認されている。

副葬されている土師器は、杯・蓋、高杯、把手付鉢などの供膳用の器種に限られ、煮沸用の器種は14号墳で甕1点が出土しているのみである。

馬具は、南群の5・14号墳の2基から轡・辻金具・か具・鞍金具・飾り金具を検出しているものの、杏葉や雲珠は認められない。轡は、東尾古墳・山畑23号墳の出土例と同様に環状鏡板をつけたものである。

武具には、鉄鏃・鏑・銀象嵌を施した鞘尻金具などが出土している。

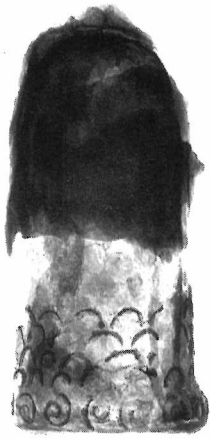


写真35 出雲井5号墳
出土の鞆尻金具

装身具には、ガラス製・水晶製・こはく製の玉類や金環などがある。

4号墳の周辺からは、瀬戸内地域で製作された製塩土器が出土している。製塩土器が横穴式石室に副葬される例は、製塩遺跡の周辺にみられものの、生駒山腹をはじめ畿内の古墳からの出土例は認められない。

最後にこれらの特徴から、出雲井古墳群の被葬者像を想定してみたい。

本古墳群をはじめ、生駒山西側の山腹には多くの群集墳が分布している。これらの群集墳の分布する山麓部には、日下遺跡・神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡・鬼塚遺跡・縄手遺跡など5世紀後半から6世紀初頭頃まで継続する集落跡で馬の埋葬遺構や水利施設・鉄製品の製作に関連する遺物などが出土している。しかし、これらの集落では、山腹で群集墳を

築造する6世紀中頃以降に継続していかない。

一方、山腹に所在する同期の古墳としては、前方後円墳の芝山古墳が確認されているのみであった。しかし、近年の発掘調査により集落に近接する植附遺跡や段上遺跡から削平された方墳が確認されている。このような集落や古墳の動向を考慮すると、山腹の群集墳は、山麓部の5世紀後半から6世紀初頭に展開した集落や古墳の断絶後に成立してくる。これらの群集墳を形成した被葬者の生前の居住地は、山麓部の既知の集落跡とは別地点や広く河内平野部にも求める必要もある。

山麓部にある5世紀末から6世紀初頭の集落からは、馬の埋葬遺構や馬歯、製塩土器などが出土しているが、土塁や柵などの牧に伴うとされる遺構は未確認である。馬の飼育に携わったとされる馬飼集団の存在を考古資料から証明するにはいたっていない。

参考文献

上野利明『馬場遺跡・鬼塚遺跡・出雲井古墳群発掘調査概要』東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要25 東大阪市教育委員会 1984

上野利明 中西克宏『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要』-1985年度-東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要27 東大阪市教育委員会 1986

北野重 竹下賢『太平寺古墳群』安堂配水池に伴う発掘調査 1982年度
柏原市教育委員会 1983

白石太一郎「奈良県宇陀地方の中世墓地」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集 国立歴史民俗博物館 1993

報告書抄録

書名 出雲井遺跡発掘調査報告書
ふりがな いずもいいせきはくつちょうさほうこくしょ
副書名
巻次
シリーズ名
編著者名 中西克宏
編集機関 財団法人東大阪市文化財協会
郵便番号 577
所在地 東大阪市荒川3丁目28-21
電話番号 06-736-0346
発行機関 財団法人東大阪市文化財協会
発行年月日 1998.
遺跡名 出雲井遺跡
遺跡名ふりがな いずもいいせき
遺跡所在地 東大阪市出雲井2-1ほか
所在地ふりがな ひがしおおさかしいずもいちょう
市町村コード 27227
調査期間 1985.10.28-1986.04.26
調査面積 3,589m²
調査原因 共同住宅建設
主な時代 室町時代 古墳時代
種別 火葬施設 柱穴 古墳
主な遺物 土器 武具 馬具 玉類 石棺
特記事項

出雲井遺跡第1次発掘調査報告書

1998年3月

発行 財団法人東大阪市文化財協会

印刷 株式会社 ミラテック